小說
東學黨
服部圖南居士著

古梅居士

自序

東學黨は朝鮮の革命黨なり、尊攘派なり。神風連なり。噴火坑なり。破裂彈なり。開國五百餘年來の弊政を一洗し。八道の天地に新奇觀を呈はするのは。東學黨を利用して。而後見る可き也

元是れ宗旨を以て經とし。攘夷を以て緯となし。虛を說き、空を談し。頑民を鼓舞し。愚人を煽動し。武器糧餉の給す可きなきに、暴然として烏合し。以て其志を爲さんと欲する者。之を吾人の眼より視れは。素より論するに足らす。然りと雖とも能く朝鮮の事情を解する者は、該黨の甚た恐る可きを知る。夫れ東學黨の根底は極めて鞏固にして。其起るや一朝一夕に非す。今日同黨の各道に散在する者幾拾萬なるを知る可からす。在官の人往々彼と氣脈を相通せり。本年漢陽に迫る

や。上下震懼爲す所を知らず。漸く去て報恩に鳩るや。鎭撫使魚允中も諭すに由なく。弘く東學を公許し彼が人心を收攬せんとを復命するに及び。國王殿下爲めに曉諭を發せしも尙ほ解散の摸樣なかりしに非ずや

而して東學黨は尊攘を主唱すと雖とも。其目的は閔族を倒すに在り。恰も我勤王黨が攘夷を唱へて幕府を倒さんと欲せしが如く。神風連が一種の敬神家として當時の政府を顚覆せんと欲せしが如し。故に東學黨は彼の尊攘を主唱せし勤王黨が幕府を倒すや一變して外交主義の開化黨となりしが如く。其目的を達すると共に忽ち一の進歩主義者となるや。火を睹るよりも明かなりとす

往年金氏の亂は時機を早まりたり。金氏が執りし所の主義目的は。東學黨に於て亦幾分か之を執れり。今日朝鮮に於て

少しく海外の事情を知る者。卽ち開化主義者流は。暗に金氏を欽慕し。氏を招ひて廟堂の一改革を行はしめんと欲する者多し。況んや全羅道沿海の地。何は金氏一味の人。一竿風月に嘯く者あるに於てをや。朝鮮の革命は今後孰れの手にか成る推知すへき也

余朝鮮に遊ふ前後二回。駐留日久しからす未た深く其形勢を知る能はずと雖も。時偶ま東學黨の暴動に際し殊に筆を操觚社會に弄ぶ者。爲めに聊か感得する所あり。歸朝の後之を知人得堂主人に談す。君曩に「南洋策」及「浦潮之將來」を著し江湖の喝采を博すと聞く然るに朝鮮の事も亦近時人の視線を引く者多し。今にして彼の風俗人情及ひ當今の形勢を捉へて一篇の政治小説に編し。之を世人に紹介せは如何んと。余應へて曰く至難なる哉這般の注文。宛も餅屋に强るに

酒を以てすると一般。余生來論評の外未た小說を筆にせしとなし。何んぞ無理ならすやと。主人又曰く否々然らそ朝鮮の事情を以て小說に寫すもの。唯「胡沙吹く風」あるのみ。然れども未た當今の形勢に說き及はす。余か望む所は政治的小說に在るのみと。主人の囑望は高尚にして當る可きに非されとも。諺に所謂太鼓も之を擊されは鳴らそ。先つ「東學黨」に初陣して。萬一の功名を僥倖せんとて主人の注文を甘諾せり

日本明治廿七年三月
朝鮮開國五百二年春二月
於大日本帝國東京寓舍
雞林逐客　圖南居士識

例言

一本書は專ら著者が朝鮮に對する處見を偶意小說と爲す者にして一種の政治小說なり

一本書中には成べく同國の地理風俗人情を知らしめんが爲め是等は大概實地眞情を寫す

一本書中の人名中外交上忌憚すべき者は假名を冠し暗に其人たるを知らしむも否らざる者は其名字を變更せず

一本書の挿畫は仙齋年信子が畢生の力を揮はれ余が所有の寫眞と余が嘗て見聞する事實の口授と且頃日阪地に來寓せらるゝ彼國名士某の實話に就て其實際を寫されたるものなれは決

して大差あるとなきを保證す

一仙齋年信子が本書に畫くや其參照として奔走勞作する所少からず爲めに完美なる此挿畫を得たるは偏に同子の厚意に出でゝ余が深く感謝する所なり

一本書の里程は殊更朝鮮里數と爲す

明治廿六年仲秋

著者誌

小說 東學黨

目次

小説 東學黨

雞林逐客 圖南居士 著

第一 洛東江

唯見一望の水流は漫々として大湖の如く。蘆荻茂る處白鷺飛び。清風起る處蓆帆懸る。實にや名に逢ふ大江の流れ。往復ふ韓船の數多き、就中一段小形なる上の船に。白き衣着ける（朝鮮の人寒暑を問ず概ね白衣を着す）五六名の乘客あり。何れも年老へる卑賤しき韓人なるも獨り左の舷に倚りて何やらん口に微かに詩吟しつゝ。滿江の風光を賞して餘念なく亦た時に何物にか感激しけん嚴然として容形を改め。腕を扼し

空嘯いて憮然長大息するものは。其人品骨格賤しからず。且は獨り春秋に富み。衣冠さへも美しく能く整ひけるより見れば無論常人の社會には非ざるべく。兩班(士族の如きもの)の一族にして轗軻不遇の士にてや有るべく。靜かに傍の老人を顧みて。問ひける樣

…此處より洛東迄何里です。老人指折り屈め四十里五十里と數へ乍ら、洛東までは是から五百五十里(此國里數を我一里彼の十里の割)と申します…。壯年の縉士は之を聞て何事か思案しつゝ。途方に暮れたる有樣なり

抑も此巨江は朝鮮慶尚道の大河にして。洛東江と稱し源を有名なる大白山に發し鳥嶺竹嶺の山脈より落ち來る數川を合し。洛東村に至りて大江を

爲し。金梅府の東濱に注ぐ。同國五大流の一にして沿岸近傍の物貨皆此流に依りて上下し、釜山浦なる日本居留地に出つる物など。恐く此江を下らさるなし。今彼の壯年の縉士は便を龜浦より求めし者にて。先つ立風縣に上り。此邊りにて所用を了へなは、再び江を溯りて洛東に至り。夫より報恩に向ふものなり。此頃は梅雨の後とて。江水最と増して。上り船の困難は一方ならざるも。幸に追手の風あれは。既に三里の水路を進み來つれ。然るに彼の縉士は急げる所用の有りてか。頻りに遲々かしく思ひて。唯舟行の鈍きを嘆つものに似たり。船頭…今日に限り下り船の多ひは合點の行ぬと。…乘合の老

人等も不審げな顔しながら。其一人…又しても漢陽邊に東學黨の騷動でも起つて。追々此方へ押寄ると の注進でも有てのとか。…と云へは今まで左舷に倚りて心急きつゝある壯年縉士は。俄然に膝立て直し。…左樣でしうかネー夫では…

今朝龜浦を出てゝ漸く四五里。早や午時に近づけ る頃より、一天遽かに搔曇り。大雨沛然として來り。 風さへ之れに加はりて。最と悽其き光景となりけ れは。船頭は急に彼の蓆帆を下し、櫓を掛代へ蓬を 蔽ふなと狼狽一方ならぬ。折しも一隻の舟上流よ り逆卷く水に押流され。舳艫宛がら獨樂の如く廻 りて。アハヤと云ふ間もなく渦卷く淵に陷りて。形

も止めぞ悲惨の最後を遂けるを。皆々アレヨ〱と呼はれは、雨は益々降しきり、風は愈々吹き荒み。大江は恰も洋海の如く。怒濤狂瀾打ち重りて如何とも為すべからざるを。壮年の縉士は初めより。アヽ痛ましや何れの土地の誰人にや。此災難に罹りやしつれと。双の眼に血涙を浮べ。両の手に熱汗を握りつヽ。暫し茫然として居けるに。何に思ひけん忽ち衣冠を脱ぎ捨てヽ。ザンブと水に飛入りたり

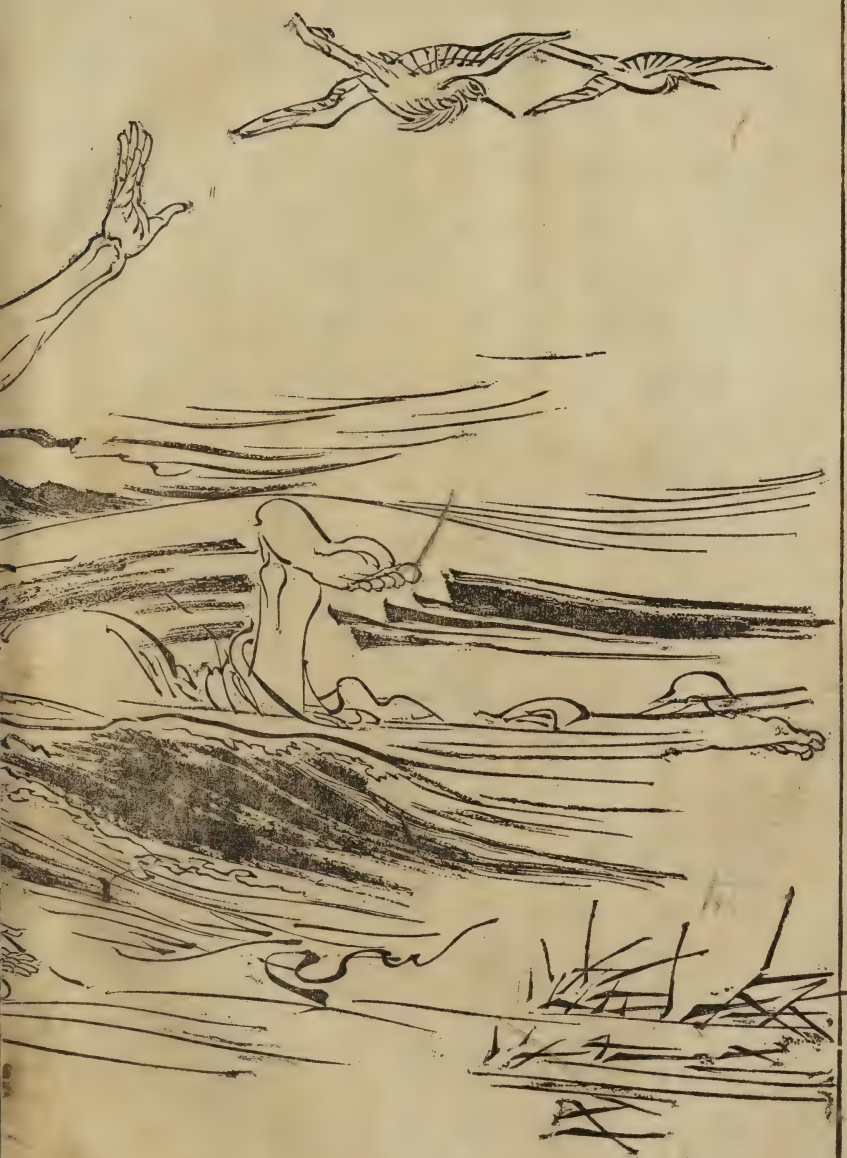
第二　奇縁淵

午時より降しきれる雨。吹き荒める風は。漸く止みたれども。日は早や暮れて黒白も分ぬ真の暗夜。大江の彼岸には。土地の漁師ども（漁民なきも假に用ゆ）大勢寄集り。

口々に喧しく荐りと藁火を燃し乍ら。甲…未だ風膚に溫氣が有る大丈夫だ。乙 脈鼓動も確かに爲て來たわい。丙 婦人の方は如何か蘇れば宜いもんだが。丁 貴公は婦人々々と云ふが此場合に婦人も何も有るものか。…此手を押さへよ彼足を抱へよとて。大勢の漁師唯ガヤ〳〵と右往左往に打騒げり

茲は梁山郡の龍塘村。その南岸の龍洞と云へる處は。洛東江流に當りて水深きと幾十尋なるを知らぞ。水勢常に飛巖に衝突して大渦水となり。洪水に際すれば甚だ危險なりとて。土人此處を龍巣窟と稱し。深く恐怖を懷く所なるに。彼の上流より來りし舟は。不幸にも此大渦に卷込れたるを。壯年の縉

士は其本國にて。水練の術に覺へあれば。如何にも不關の者どもやと。逆卷く濁流に飛び入り。苦もなく水勢を掻切りて。其下流にまで出しに。桃紅色の外衣と黑き頭髮のみ見へて。水面に浮きつ沈みつ流るゝを認め。是ぞ必定遭難者ならん。イデ救はんものとて。氣を急ち。力を込めて押切りて難なく之を抱き上ぐれば。憐れや年若き娘の死骸。左の腕に確と懷き締め。右手差延べ陸地の方へと泳がんとす。固より水練に熟れたる身にしあれども。名に逢ふ大江の水勢に其働作も自由ならぞ。數十間も南の方へと流されける兎角する中如何しけん。忽ち其身も共に大渦の中へぞ卷込まれ。姿も見へぞ成

りにける
此日龍塘の漁師共は。江頭に集りて萬一の變もやあらんとて一隻の救助船を準備したりしに。今しも上流より來れる船の沈沒せるを知れど。平日恐怖を懷ける龍巣窟なれば。誰一人として之れに趣くもの無き折柄。遙か此方の澱に男女二人の死骸の浮び上れるを認め。遽かに舟押出し五六の漁師は勢よく櫓櫂を執りて流るゝを追ひ。辛ふじて之を救ひ上げ舟中に抱げ込みけるに。男は未だ片息さへあり。女は微かに脈の鼓動る摸樣なれば。漁師共に大に喜び急ぎ岸頭を差して漕ぎ返り。偖こそ斯くは打騷ぐなり

第三　獄裡夢

轉話す。梁山郡と云へるは東北彦陽縣に接し。西南は洛東江の末流に當り。郡衙は其中央の地にあり西岸には有名なる大成館鄕校を建設し。富饒なる土地なり。嘗て以前此處に郡守を勤め善政の聞へ高く。郡民皆神の如く敬ひける。朴英駿と云へる人あり。英駿は年既に耳順を過き。顏面に老ひの皺波を漲せ。髯髮半は霜を帶びけるも。生來仁義の人にして且氣慨あり此國官吏社會の常慣なる。上長官の鼻息を窺ひて。媚を呈するなどのとは毫も爲すを屑しとせず唯率直至誠の老吏なりしに。時の東萊府伯尹定建と云へるは。王妃の一族にして威權

赫々當り難く。下百姓に重斂を課し。其膏血を絞りて顧みぞ。然るに梁山の郡守朴英駿は。平生斯る性質なれば。痛く府伯の處爲を惡くみ百姓の塗炭に苦しむを憐み。屢々夫れとなく定建に諷諫せしともありたれども。所謂良藥は口に苦き譬の如く諫言は却つて耳に逆ひ。郡守の身として出過ぎたる所爲なりとて。或時大に譴責さへ蒙りしのみならぞ。是よりは何に就けても最と心惡き待遇を蒙るととはなりぬ

當時尹家は外戚の權を弄び。朝廷の高官は多く一族の任する所にして。其威勢飛ぶ鳥も落つべく。生殺與奪の權は悉く彼が掌にありて。最と恐ろしき

勢ひなるに。英駿は素より是等の事理を知らざるに非らざれども。日頃率直至誠の性なれば。下百姓の爲めに老ひの身を犠牲と爲すも何か惜まん。死は覺悟の前。盡し得る丈は盡し見んものと斯くは屢々諷諫をぞ爲したりける。然るに案の如く尹定建は。深く之を遺恨に思ひて。其後惡しざまに英駿を讒しければ。時の朝廷大臣に縁故深き定建の上申なれば。何條詐言あらんとて。英駿は忽ち牢獄に投ぜられ。苛責の笞鞭に苦しめられ。遂に僅かに死罪を免れ遠惡島の處刑となり。家財悉く官沒せられ。一家擧つて南海縣の西珍島と云へるに。流竄の事と定りけるぞ無慘なれ

英駿には妻金氏の腹に二人の子あり。長は男子にして、英陽と云ひ。次は女子にして香蘭と名づく。此時英陽は僅に十三歳なれども。生來父の氣風を承けて敏捷の性質なれば。痛く一家の不幸を悲しむと共に。尹族の非道を惡くみ。父が遺憾の程を推測りて。之れを慰むるとなど最と殊勝に見へけり。香蘭も早や十歳。兄に似て英敏ければ何となく憂を含びて。母と共に僕の安成忠を勵し立退の準備など爲しけるも。平生仁德をば盡したる郡守なれば。其恩澤に感じて別を悲しむものも有る可けれど。後の咎めを惶れて郡民一人の訪ふものもなく斯、る心細き有様にて住み馴れし梁山の邸宅を見捨

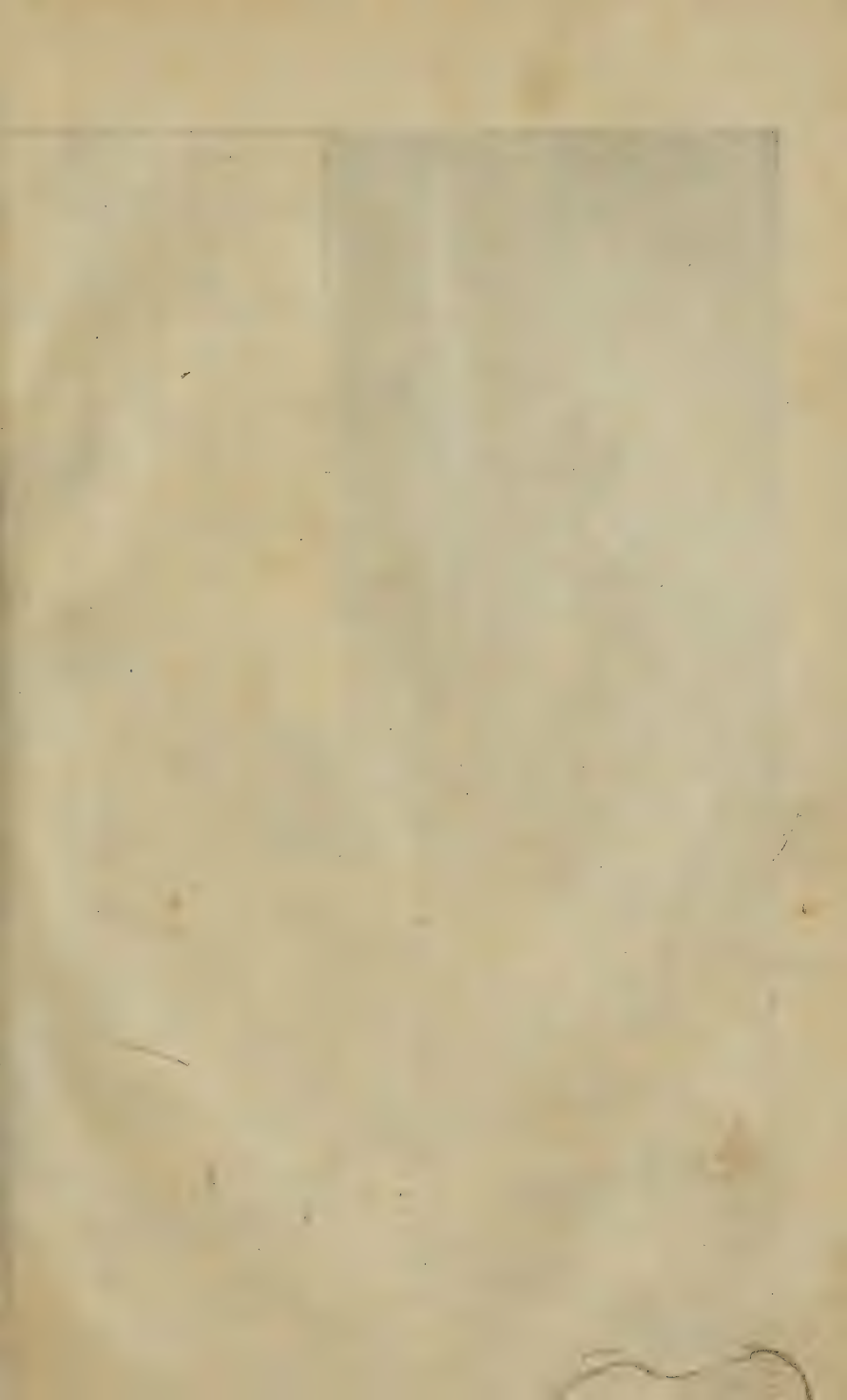
て、旅路遥けき南海の一孤島に追放せらるゝ朴氏一家の愁傷は如何ばかり。彼の韓愈が潮州に貶せられし。其昔の光景も斯くやと思はれて憐れなりき

第四　配所の月

珍島郡は全羅道南海縣の西に當れる掌大の嶋地にして。北山の正南麓に治廳を置き。繞らすに城廓を以てし。東西南に關門を開けり。朴氏一家は日を經て秋の半頃此島に渡り着き。島吏の差圖に依りて。有喬里と稱する最と寂莫しき山腹の一小村に配所の月を眺むるとゝなりたり。英駿は年さへ老ひし身にして。殊に今回の如き不慮の災難に會ひ。

老ひの心を痛むるとも少からざりければ。日頃壯健の性なれども。夫や是等の爲めにか大に耄衰に傾き。病めると云ふには非ざれども。流竄の後は常に寢をさへ離るゝとなきに就ては。妻の金氏は一家の生計に心を惱し。或時は他人に雇はれ。又或時は賃仕事なども爲し。兄妹は朝夕父の膝下にありて經書なども教はるゝ間隙には。共に山に入り柴茅なんど苅り來りつゝ辛くも一家の煙を揚げゝるに。或日の事とか。突然門頭に立ちて案内を求るものあり。妻は怪しみ乍ら出迎ふれば。年齡三十許身に白き綿服を着け。見苦しからぬ紗帽(中等以上の帽子は馬毛を以て製す以下は竹片を以て之を代ふ)を戴き。人品左まで下賤しからぬ男。……卒爾

なる參館御怪しみもある可けれ。拙者は鄭朱明と申し嘗て漢陽に仕官の節もありたれは御主人は御承知ならん。先年來本島碧波亭に此身も同じく配所の月を眺むるもの。同病相憐の思ひに堪へ兼ね。且は徒然の餘り。早く御伺ひ致し度く存せしも人目如何にやと相憚り。今日に及べり……とて最と慇懃に挨拶せられけれは。妻は驚き乍ら斯くと英駿に知らすれは。英駿も暫し思案し。忽ち心當りありけん膝を打ちて……ヨシ〳〵此方へ御案内申せ見苦しき荒屋膝を容れらる可き所もなきに無禮の程は御免を蒙れ。……とて妻を促し。英駿が常に臥せる蓐など取方付け。聽て一間に通しけれは。客人。鄭

朱明は莞爾として云へる樣。……御面會は初てなれど。嘗て在官の節御高名を承りたり。然るに御案內にも候はん。彼の先年の騷動に金浩權氏の一味となり。開化黨の旗擧なせしも。時機未だ熟せぞてや有りけん。一敗忽ち血に塗れて。金氏等身を脫れ日本に航し。同志多くは刑臺に斃れしも。拙者は幸に惜しからぬ一命を全ふし。茲に流刑の處分を受け。早や三年以來空しく光陰のみ送れど。斯る僻遠の海嶋漁どる翁。牧艸かる童の外には語ふ侶なく。唯日夕恨しげに漢城の空を眺むる事はかりにて候。憐れ永く徒然の友とし御交りを辱ふせん。……と最と鄭重に賴み入るを。主人の英駿は却て面目なげ

に。……斯く仰せられては痛み入りたる次第實は微〱足下の事も承り居りたれども。渡島以來老の身の此有様御尋ね申さんも心底に任せぬ譯。思ひも依らぞ今日御來訪を辱ふし。却て汗顔の至り。拙者に於て此上なき滿足。明日をも知れぬ此身は借て置き行〱は愚息の御引立も相蒙り度し。……など打解けつゝ應へすれば。鄭氏も大に喜び又傍りを顧み慨然として云ふ様。……今に初らぬ尹族の專横。アタラ正義の人々をして恨を地下に呑ましむるに非ざれば。海島窮命の人たらしむ。而して朝廷の事は私局のみ多く。媚を上國清國を云ふに呈し。彼れ欽差星使の爲めに瞞着せられ。却て親しむべきの日本を

輕んト。言語に堪へざる失躰は多けれども。誰一人之を彈劾するものなし。隨て地方官などの暴戾は。日に月に甚しき有樣にて。憐れ四民は其苛政に苦しみ。路頭に泣き。弊政の結果は益々貧弱の亡國たらしむるに過ぎず。貴下の如き直言の士あらは。悉く以て海島不起の人たらしめんとす。痛ましき極りに非らざるや。……と血淚雨の袖を濕しつゝ打嘆ちければ。英駿も慷慨の情にや堪へざりけん。唯だ默然として雙瞼に玉淚を浮べ。……御嘆きの程は御同樣お察し申す。乍去言ふて唯今及はぬ嘆き。足下は尙は春秋に富めは又來る時節もあるべけれ。我身の如き役にも立たぬ老衰の生きながらへても

詮方なし。此上は九泉の下足下等が本望を達する の日を待つのみ。……とて暫し何事も言はで悲憤の 餘りに打伏したり

第五　別離涙

丈夫意氣相投ぞ一見恰も舊識の如し。朴英駿は彼の鄭朱明と交りを結びてより。悲嘆の中にも大に安堵なせる者の如く。鄭氏が親切にも三日に擧げぞ訪ひ來る度には最早初の如く慷慨の談話に涙を絞る樣のとなく。唯四方山の世間話の序には子息英陽の行末なぞ依賴し。又英陽は何時となく深く鄭氏を欽慕し。他日我父の鬱忿を晴らし其志を爲さんには此人に依るべしと。獨り心を定め。果て

は有喬里より碧波亭まで。其道程も遠からざれば。出でゝ野山に柴艸かる序には。經書を懷にして之れを訪ひ。懇ろに教授を受け。鄭氏も英陽の機敏にして年齡にも似合はざる義氣あるを見て。末頼母しき少年なりとて。折に觸れては目下韓國の形勢など說き示しけるより。英陽は早くも開國主義の人となれり。斯りける程に其年の霜月頃。父英駿は一夜風邪の心地なりとて打臥しけるに。翌朝より熱氣最と強く。如何はせんと母子三人途方に暮れけれども。斯る僻遠の海島には醫者とて住ふものなく。又家に用意の藥もなければ。夫れと心付きて英陽を碧波亭なる鄭氏の許に走らせけるに。鄭氏

も驚きて共に馳せ來り。幸ひ氏が漢陽より携へ來りたる寶丹（我寶丹を彼地に行へる）の殘りありたれば。取敢ぞ之を服用せしめなど。種々介抱を盡せしも。熱氣更らに去りやらぞ。果ては人事不覺の有樣にて。惡くき尹族思ひ知れなど、空言のみ叫びて。其夕刻頃空しく夜臺黃泉の客となられしが。朽ち果てし老の身と云ふには非ぞ。アタラ正義忠直の士をして斯る悲境に憤死せしむるもの。抑〻誰の罪ぞや妻の金氏は勿論英陽香蘭の愁傷は言までもなけれど。偖て止むべきに非ざれば。鄭氏は三人を激まし。次の日法の如く漸く野邊の送りを爲し。幸ひ鄭氏は獨身の事なれば。彼の碧波亭の庵に英陽母子

三人を引き取るとに定めて。其日は家に歸り翌朝早く來りて。朴氏がこれ迄懇意を受けたる里人等に其由を告げで挨拶なし。家財とて別にあるべきに非ざれば。難なく此地を引拂へり。之より四五年の間は鄭氏が親切なる世話を蒙りつゝ。何事もなく過ゆく中に。英陽は既に十八歳香蘭は十五歳の春を迎へ。殊に兄英陽は學識さへも進達し。天晴れ父の子なりと云はるべき。天然に備はる品格は最と頼母しきとどもなり。然るに鄭氏は仁愛深き人なれば英陽が此年齢敏捷悧發の性質を以て。藻鹽焚く海士の兒群と交り果てんとの痛しくやありけん。偶ま舊知の某頃日尹族の寵を受け高官に登

り居る由を聞き。便を得て竊かに之れに英駿が孤兒の事など最と憫れげに言ひ遣しに。此策はよく的中て。某は或る折廷臣に由を語れるに。英駿既に世に亡き上は其妻子は赦免して然るべしとて。程を經て島吏より朴氏特赦の趣を達せられたれば。母子の喜び譬へん方なく。鄭氏も斯くあるべしと思ひしも餘り迅速に事の運べるに驚き乍ら深く之を喜び。此上は一日も早く立身の見込ある地に趣きて一旦落ちし家名を再興するが。亡父に對してもも第一の供養なるべしとて。嘗て梁山を立退ける頃まで忠實に朴氏の家に仕へける僕安氏は此頃玄風縣の近傍に住ひて相應の生計を立てつゝあ

る由を風の便に聞き居たれば。先づ之れを頼りて相談する方然るべしとて。鄭氏の勸誘に母子は大に欣び。出發の仕度を爲せしも。忍び難きは恩愛深き鄭氏との別離なりけり

第六　孝子嘆

慶尚道の金海府と云へるに此程新たに府使として赴任せる。尹鎬壽となん呼べる人は。東萊府伯尹定建の從兄弟にして。同じく當時朝廷に時めける尹應直の一族と知らる。此尹鎬壽も亦極て殘忍なる人にて。殊に淫慾に耽るの癖さへありて。東萊府に來任するや否や。酒池肉林歌舞管絃夜を徹し。彼の朝夕膝下に侍する傾城なんどは（傾城は藝妓の如ヿと雖ども府使の寵は皆

ま數名を左右に侍せしめ其實官妓の觀あり面白からずとて。頻りに民間に美人を求めける。元來此府は洛東江口の一大都會にして。東には烽岱巍然として聳へ。西北には巨門洞山高く雲際を摩し。西南には任山斷崖を以て峙ち。而して其中央に城廓を構へ繞らすに高壁を以てし。治域實に廿一面（面とは猶ほ邑と云ふが如し）より成り。人煙稠密商估繁昌の地なれば。此處に府使たるもの其威勢の程も推知るべきなり。去れば斯る沙汰の聞へけるより。心ある人にして平日府使の內行を知るものは。大に之を指彈しけるも。若し容姿よき娘など持てる人にして。其所望に應ぜざる時は。如何なる憂目に會ふやも計り知るべからずとて。何れも娘ある

人々は窃かに之れを匿まいける
然るに朴氏母子三人は尽きぬ別離の涙を絞りて鄭朱明に再会を約しつゝ、不如帰と鳥が啼く五月中旬頃便船を求め海南県の一海岸に上陸しけり。母の金氏は熟々心の中に思ひ煩ひける様。是よりは不知案内の山又川。女小供の足弱のみにては。幾日幾夜も歩らねば。玄風とやらに到着らるべき由もなし。此心細き永の旅路には。如何なる憂き艱難に遇ふやも知るべからず。別けて心に掛れるは娘香蘭妙齢と云ひ此母の子には鳶が孔雀の譬に違はず容顔風姿すら最と美しければ。途中にて悪漢等の手に罹り。思はぬ難儀を見るやも知れず。ハテ

如何にして宜らんやと。種々と考ふれど別に工風の致様もなければ。桃紅色の被衣（中等以上の婦女外出するときは被衣を着くるを常とす）を眼深に被がせて。外より容易に其顏をば窺ひ難くなせり

金夫人は元來氣丈の人にて。未だ老ひりと云ふにはあらぞ。五十路の坂にさへ二三年の猶豫ある身なれど。此年來の艱苦に弱りけん。最とゞ憔悴て見へけるを。兄妹は之れを勞わりて我れ先にと立ち步み或時は轎輿（普通二人若くは四人にて擔ぐ四面ある神輿流の者なり）にさへ交代り乘りつゝ。今日と暮れ明日と明けて幾日か山路や野邊を行越して障りもなく步り來る中に聊がの旅費も既に囊底を拂ふのみか追々夏向の時候となる

れは旅馴れぬ身は最と苦しく。疲勞を增し晝は食を人の軒頭に乞ひ夜は寺院又は仁慈ある人の家に宿りを求めなど最早轎輿にも乘るをさへ出來ざれは一日僅かに數十里の道程を歩みて早や二月の日も過ぎける頃漸く玄風の市街に着きければ母子三人は共々に其無難なりしを喜びて先づ取敢ぞ僕安氏の住家をば尋ねけれども誰一人之を知るものなく果ては此村に左樣な姓名の人はなし夫は院塘にては非ぞやとの事に這は如何にやと今更に張詰にし梓弓絃も絶たる心地して是非なく其院塘とやらんを尋ねんものとて今朝は玄風の街はづれに至れるに大空は一面墨の如く

掻曇り雨さへ催す野路の中母は俄かに癪の氣差し起りたりとて傍への松の木下に打倒れ頻りに悶へ苦しみければ兄妹は驚き乍ら腹を抱へ脊を擦りなどしつゝ英陽母上さん嘸御難儀で御座りまましよう彼れが處（安氏の家を指す）も程遠くはありますまい今暫らく御辛抱遊ばしませ御藥なりとも水なりとも需めて參りましよう……とて兄英陽は妹香蘭に介抱を頼みて彼方を差して行く中に霖雨盆を傾くるが如く後見返るに咫尺も辨じ難くなりしぞ是非なけれ

第七　義僕節

洛江の東野に載尼山と云へるあり。其東半腹に院

塘村とて戸口四十餘の一部落ありける。元來此土地は玄風市街に連れる極めて膏腴の所なれば。農作など盛んに行はる。朴氏の忠僕安成忠は生來梁山近傍の農民なりければ。主人流竄の後は他に依る可きの知人もなく。聊かの緣故を以て此院塘に農作を試みんものとて入り來り、初めは他人に雇はれ些少ばかりの賃錢を得て生計を營みしも。元來實直の性質にして其行節險ければ里人の信用も宜しく漸次儲へも增ければ。先づ荒蕪たる田地を求め。力を盡して之れを耕しなど。其勤勉一方ならず。二年前或る豪家の娘までも妻に迎へて。今は田地の一二町步も所用し。何に不足なく暮すもの

ゝ。恩遇深き主人英駿一家の成行を案じ煩ひ。常に獨りのみ心を苦しむ。實に世に得難き忠僕なり此頃は梅霖の時候とて。今朝よりは。又雨強く降り出し。風さへ之に加はりて。最と荒々しき日柄なれど成忠は何處へか出向くべき所用のありてか。庭先にて雨具など着るから。妻に對ひて。……我は今日玄風に例の取引用があるからに鳥渡行てくるぞ……とて足早に出で行けば。妻は。……マア此天氣にと云へども早や後影だにも見へぞ。成忠は降り來る雨を心にも掛ぞ。玄風に程近き處まで歩みしに。遙か傍への松蔭に旅人にや甃れ居る摸樣なるのみか。此大雨に狂氣の如く。亦振騷し此方を差て走り

來る十七八の少年あり。何事ならんと暫し傍らの木蔭に潜み居たるに。少年は血眼を開き右左睨つ。……何等の惡漢ぞ。我母人の急病に付込み。妹を奪ひ取らんとて剩さへ母を歐ち殺したる横道もの。我刃の切味知らぬか。……と涙と共に叫べるを。成忠はフト其顏を仰ぎ見れば。正しく主人英駿の一子英陽なり。驚き乍ら駈け出て。……若し若旦那樣。如何遊ばされました。私は大旦那の御恩を受けました奴成忠で御坐ります。……と云ふも先つは涙なり英陽は遽てながら。熟々成忠の顏を眺め。幼稚心に覺へありけん。憂ひの顏に喜色を浮べ。刃を鞘に納め借て云ふ樣。……其方に別れて早七八年。珍島の配

處に父も果敢なく此世を去り。慈悲ある人の愛護に依り。母子三人惜からん露の命を繋きしに此夏意もよらぬ赦免沙汰。去りとて頼る方もなし。風の信に其方が玄風とや云へる土地の傍りに住へる由を聞き。母も大に喜びて足弱三人夜に日を繼て今日漸く此處まで歩り着きけるに。此の天氣の報にや。母が俄かの病氣に。拙者は詮方なく藥劑なりとも需め來んとて妹香蘭に斯々と申し付け。彼方の松の木下にて介抱させつゝ。逸早く市中に驅りて所用を辨し。周章狼狽き馳せ歸れば。アラ無慘やな口惜しや。母は何者にか痛く毆打れけん。紅血に染みて見らるゝ通りの最後。妹は右の惡漢に拐帶

されたるか。影だに見へぞ。唯この小劒のみ道の傍へに落ち居たりしより考ふれば（韓人男女共平生必らす小劒を佩び踏用に供す）正しく健氣なる妹なれば。一時は之を以て惡漢に抵抗しならん。其方に會ひしは何よりも嬉しけれど。此鬱忿を察し呉や。……とて丈夫の涙を絞りければ成忠も首尾顛末を聞き。且驚き。且嘆き暫く打伏して默然たりしも。漸く頭を上げ。……誠に思ひ掛けなき御災難。今一歩早かりなば。此後悔は無るべきに遲かりし。……と已れを責めながら。共に彼の松陰に赴むけば無慘や金氏は娘の危難を見兼ね病を押し起上れる機會。胸骨痛く蹴られ。其儘息絶へたりと見へて。胸に疵傷あるのみか。多く吐血さへ爲

し居れり。英陽は悲嘆の中にも頻りに妹の身上を案じ。敵の踪跡を尋ねんとすれど。雨は益々篠つく如く。雷鳴さへ烈しければ。先づ安氏が許に引取り其後の相談にせんものとて成忠は否める英陽を強ひ。金夫人の亡骸をは。已れが背に負ひ乍ら。恨を遺しつゝ西の方さして還れり

第八　再生の縁

偖も龍塘の漁師に助け上られたる。年若き男女二人は。運強くも息吹き返し。互ひに左右を見廻して。不審更に晴れやらぞ。然る處に漁師等有形顛末を物語りければ。若き男も初めて前の事など思出し。救助に赴きたる云々の次第を告ければ。少女は夢

の覺たる如く。若き男に向ひて厚く謝禮し且二人より漁師共に對ひては。殊更再生の恩を謝し。男よりは何やらん紙に捻りて彼等に贈れり（日本居留地近傍え日本銀貨の通用を知る）

若き男は疑もなく。龜浦より便船を求めたる壯年の縉士なれども。彼の妙齢の少婦は何れよりし。又如何なる人の娘なるや。其容顏の美艶なる。實にや沈魚落雁閉月羞花の觀あるのみか。其風姿も賤しからざれば。由緒ある人の愛孃にやあらんと思へば。何となく哀れを催し縉士は之を勞りて。……圖らざる御災難嘸ぞ驚き玉しならん。之よりは及ぞ乍ら拙者御力にもならん。御姓名聽かせ玉へ。……と云

ふを聞き。最と耻しげに打潤れながら。……御親切な
る御尋ねに從ひ。申上るも心苦しく候へども。妾は
前の梁山郡守朴英駿の娘香蘭と申すもの。父は疾
く配所に死去かり。此程母及び兄英陽と共に知人
を頼り玄風に罷越たれど。尋ぬる人のあらざれば
更らに院塘村に向へる途中。母が俄かの癪氣に兄
は市中に藥を求むるとて赴ける。後雨を冒し覆面
なして出て來りたる二人の兇漢。有無をも言せず
妾を捕へて遁げ去らんとしけるを。母は病氣なが
らも無念にや堪へざりけん。起上りて妾を障へん
としけるを。痛ましや一人の兇漢足にて母を蹴倒
しつゝ走らんとするや。妾は一生懸命佩びたる小

劍取り出さんとするや此時遲く彼時早く。賊は既に其小劍を奪ひて彼所に打捨てければ。妾が遺憾は譬へんようなく。宛がら大鳥に攫まれし雀の如く。彼れが小脇に擔がれ乍ら。其日の夕刻頃最と寂しき山中にある酒幕に伴はれ。妾の双手を縛り。妾が口に猿轡を箝め。一間の中に閉ぢ込められしが。妾の胸中には我身の行末を案ドるよりは。母は如何になりなん。兄は如何にしけんと案ド煩ひける。去にても此兇賊は何者なりや。又妾を如何に爲すやとの疑惑は忽ち胸に浮びし頃。隣室にて彼等濁酒（朝鮮にて濁酒と火酒とあり）を汲みかわしながら。私語きけるに。……

甲　意ひ儲けぬ今日の代物褒美は慥に十貫文（一貫文）

我が壹圓五十錢 乙 此天氣に夫位ひの儲けがなくちや此商買が出來るものか。甲 夫はそうと明日金海まで下ろうか。乙 善は急げ甘い物は前夜に食へ早いが肝要だ。……と二言三言漏れ聞へければ。ハテ情なや妾を金海府に送りて。府使なんどの侍妾となし甘き汁吸はんとの計略なるかと胸も張裂く思ひすれど。女の身の甲斐なき遂に其夜は一間の裏に泣き明かしぬ。明くれば二人のものは各恐ろしき刃物を持ち來りて。妾が束縛を釋き猿轡を外し。偖て云ふ樣。……甲 何にも怖がるには及ばぬ。今日に金海に伴ひ嬉しい目に逢して遣らん。温良に言こと聽て行くがよい。乙 女の習に聲なぞ立てヽ遁よふとで

もすれば。此刃物で眞二ッ割どうじや〳〵。……と威嚇されければ。妾は生きたる心地せぞ。唯ワナ〳〵と震へ乍らに諾づきければ。利口な奴なりとて妾に飯一腕を押付に食はしける後。其山の下手より彼の舟に乘られつゝ。二人の兇賊に護られて下れる中。雨となり風となり天氣俄かに變りて遂に恐ろしき大渦の中に卷き込まれたるに。圖らぞ御身の爲めに再び此世の人になりたるのみか。悪き兇賊等氣味よくも死に亡て金海の憂目を免れ。母の讐も自然に討取りたるは勿諸の幸。去り乍ら頼りなき女の身。母兄の所在を探らんにも便なければ。アハレ妾を御見捨てのふ。願ひ侍りぬ。……と果は涙に曇

りて打伏しけるは。芙蓉の雨を帶ぶる風情に彷彿たり

第九　生別の旅

抑も此紳士は韓國の人に非らぞ。東方日出の國人なり。嘗て釜山日本館（古來居留地を館と稱す）に渡りて名を商業の視察に假り。居留人の狀況。領事政治の得失。日韓交涉の事情等を探り居けるに。往々意想の外に出でゝ嘆息にさへ堪へざるとあれば。屢々筆に書せ。口頭に言せ。其弊害の匡正を試みしも。這は却て身の仇となり。遂に韓國一般に足蹈ならぬ。嚴かなる命令を蒙り遺憾ながら一たび鄕國に還りける。柳南陽と異名せる人なりとぞ。知られけり。抑南陽は鄕

國に還りても。韓國の事一日も忘るゝ間隙なく。或日熟々思ひけるに。日韓は元と兄弟の國際なり。地形上より云ふも唇齒の關係あり。今後東洋の勢力を强ふして。彼の露英の如きに對せんには。日本は須らく朝鮮を保護し獨立を全ふせしめざる可からず。我れ在韓の時の如き。屢々交涉の事件を引起し。或は金海捕囚事件。或は絶影島破屋事件。或は全羅沿海虐殺事件。皆その談判の好結果を見ざるのみか。却て兩國交際上の感情を害するもの少なからず。彼の軍艦派遣の事の如きは。威嚇政略に過ぎて。遂に布哇の政事家までに非議せらるゝに及べり（布哇に於て日本人參政權の事に對して同國政事家某例を軍艦派遣（朝鮮に）の事に取りて痛く非難せる由新聞に見ゆ）斯くては到

底日韓の交際を圓滑ならしむる能はざるのみならず。東洋の運命を安固ならしめ。外歐米と相對峙するを誠に難し。今にして大に韓國を保護せざる可からず。如かず我れも志を飜して能く大局に着眼せんにと。心窃かに決する所ありしに。年過ぎて最早彼國に渡航自由の事となりければ。嘗て數年前南島流浪の折より交を結びつゝある。朝鮮の名士金浩權氏にも。志の程を告げ。彼よりも亦種々の注意を受け。聽て再び釜山浦に上陸し。其夜豫て用意する所の此國の衣冠を着け。深く内地に入らんものとて。先づ下端（洛東江口）に微行し夫より江を渡りて金海府に入り。聊か探り得る所あり。急ぎ玄風縣近

傍に至りて更らに報恩に赴かんものとて借てこそ龜浦より便船を求めたる次第なるに。圖らざも今回の奇禍に罹りて。少女香蘭の物語りを聞くに就ては。益々忍び難き思を爲し。且彼れが金海府に拐帶されんとせしは。必定彼の地にて聞しが如く府使尹鎬壽が懸賞して美人を求めけるより。無賴の惡漢などが之を奇貨として。斯る所業を爲しけるならん。斯る無智無謀なる地方官を任ざる當今の政府は。其弊害の程實に思ひ知らるべく早晩一改革を促さゞる可からざ。夫は兎も角香蘭も不憫のものなり。若し薄情も遇したらんには。如何なる短慮を起すやも計り難く。聞けば支風懸の市外にて

危難に遇ひ。其處にて母兄に引分れたる由なり。幸ひ我れも此近傍に尋ぬへき人あれは伴ひやらんとて。之れを勞りつゝ其由を告けれは香蘭も大に喜びつゝ共に出發せんとし。柳氏は獨り心に思案する所あり。先づ梁山より彦陽縣に迂回り日を經て彼地に至らんとて香蘭には轎輿に乘らしめ。自身は馬を雇ひて黄山驛道に出で之より二人徒歩して彦陽に向へり。然るに途すがら香蘭は頻りに柳氏に其郷國は何れにて如何なる身分なるや。又如何なる所用の旅行なるやと尋ねけるに。柳氏は困ト果て樣々に之を辨ト。唯艸梁村（釜山日本館の隣村なり）の生れにて商用の為めに旅行するものなりとのみ告げ

て素より日本人などゝは云ふ由もなく（婦人を概して外人を恐る妙齢の處女は最も甚しく釜山舘の如き一人の韓女を見す）かりしが香蘭は尚は怪しみ乍ら突然。……貴下妻君は御坐りましようと。……出し抜けに問はれければ。柳氏は何氣なく。……左様な者がありますものか……と答ふる間もなく。香蘭は透さず。……夫では貴下の御頭は。……と急所を衝かれて柳氏は首尾り惡く。……旅行に就て故意と結び上げました。……と紛せたれど香蘭は不審げに笑ひ乍ら。心の中に一の畫線を畫きつゝ。……若しも眞實左様なれば……去れど尚は疑惑の雲霧は晴れざりき（朝鮮の人は妻を娶れば必ず結髪戴冠す否らざる者は後へに頭髪を垂れて冠せず）

第十　虎口雁

柳氏は香蘭を伴ひ黄山驛道より彼の有名なる車石村（小瀑あり崖上拱大の石を車石と云ふ往年通慶寺建築に當り車輪該石に觸れて半面削裂す是れ佛力なりと傳ふ）川前村等を過ぎて彦陽縣に至り。茲に數日足を駐め。更らに思ふ所ありて弓根亭より西北に向ひて雲門峴に上る。此峴は頗る高山にして其絕頂より淸道の峻嶺及び蔚山の文守山を望み、彦陽の地勢一眸の下にあり。柳氏は萬一の日にもやとて其地形などを相つゝ。香蘭は疲勞を休息めんとて傍への巖根に腰打掛けてありしに。遙か前の槲木の中より何やらん恐ろしき聲して躍り出づるものありければ柳氏は驚き乍ら熟視すれば。牛をも欺くべき猛虎は眼を怒らし口を開きて。唯一呑にせんものと

此方を差して疾風の如く駈け來たれば。柳氏は身に短劍を佩るの外刄物さへ持たざれば。少女香蘭を顧みる間隙なく。右に避け左に遁れ。アハヤ一髮の間彼れが鋭き爪牙に罹らんとする折。俄かに傍「への艸叢より猛然と火燃へ起りけるに。猛虎は忽ち何處にか遁去りしにや。其影を失ひたれば。柳氏は一息ホッと衝き。後へに瞠と倒れつゝ。暫し前後も知らざりしに。フト彼の艸叢の煙に驚き四邊を視れば。燧火したる痕跡あるのみにて。香蘭の影も形も見へざれば。若しや猛虎の爪牙に罹られ彼れが餌食となりたるか。夫にても不審かしきは此燧火。虎は火烟を怖るゝとは此國の童子までも心得

居るとなれば。（朝鮮の人居常長煙管を携ふるもの之が爲めなりと）這は香蘭が俄かの氣轉に出でたるか。嗚呼我れは曩きに香蘭を救ひ。香蘭は今又我れの危き一命を全ふせしめたるか。去りとて其隻影の見へざるは。燧火を移すや否や何れへか遁げ去りたるにやあらんかと。柳氏は途方に暮れつゝ。香蘭や〳〵と聲高く叫びけるに。唯谿に響けるのみ。詮方更らに無ければ。柳氏は猶は近傍を探りて。前來し路を蹈戻りて弓根亭に還り。誰れ彼となく心當りを尋ぬれども。手掛とてなければ哀れ必定猛虎の腹を肥しけんと。涙に暮れつゝ獨り何地の方へか赴きけり

第十一　志士の腸

然るに朴英陽は盡きぬ怨を遺し。僕安氏に伴はれて院塘の家に至りし後。安氏夫婦の親切に依りて。野邊の送りも濟したれど。妹香蘭の事頻りに心に掛りて寢食さへ安からねば。種々安氏を説きて身の暇を乞ひ。暫らく賊の蹤跡を探り。妹の行衛を見屆けんものとて。明日にも幸ひ喪中のとなれば大笠眼深に打被ぶり喪服の儘にても（朝鮮にては貴賤を問はず三年の喪に服す）（其間大なる深笠と麻の衣を着す）何れへか出發せんものと内々其用心を爲せる折柄圖らずも紳士らしき一人の男門外より案内を乞ひければ。安氏の妻は怪しみつゝ出迎へしに。彼の紳士恭しく一禮し。……朴英陽君と申すは此家で御坐りますか。……との尋ねに妻は如何應

へて然るべきやと逡巡ども思ひ切りて……左様ですが御姓名は何方様で御座ります。……と答へけるに客人。……拙者は初面識の者にて艸梁村の柳南陽と申すもの。御令妹は御承知なり。夫れに就けて至急御相談申上度と存ドて推参候もの。宜しく御取次き下されよ。……と最と慇懃に通ドけるを。奥の一間に今や妹の爲め旅立せんものとて用意なせる英陽は。之を聞て大に喜び去らば香蘭の行衛も分るとならんとて。急ぎ安氏の妻に命ドて一間の中に請ドける。聽て英陽は喪服の儘にて出迎へ。互ひに初面識の挨拶を了へ。柳氏は靜かに口を開きて。……承れは先日は圖らざる御遭難。御賢母は定めし

御回復ならんと存せしに。今の御装束夫では其場で御最後を遂げられしか。重て加て御令妹の御行衛も定かならず。嘸かし非常の御心痛御推察申上ます。然るに其御妹香蘭とやらんは。拙者洛東江に於て御難船の場合を御救ひ申せしも。一時は共に水底に没せしに。幸ひ龍塘の漁師どもに助け上られ。二人共運強くも蘇へり。始めて貴下の令妹にして玄風にて二人の悪漢に奪はれ金海府使に賣らるゝの途中。此災難に遭れたる由を承り。御痛さの餘り拙者も聊か當世に志あり玄風縣近邊にて尋ぬべき人あるを幸ひ。共々御令兄なる貴下を尋ね。御兄妹の御心休めさせ申さんと。時節柄少しく憚

る所もあれば。梁山より彦陽に迂回し。夫より其近傍を彷徨時日を移さんものとて。有名なる雲門峴に登り暫し山上に休息し處へ。何處よりか猛虎躍り出て。此方を認め飛懸りたれば。驚きながら立向ひ之を防げる折柄。傍らより火烟起り虎は忽ち遁げ亡しに。フト令妹の事に心付き其所在を探ぐるに更らに影だにも見へず。或は彼の猛虎に掻浚はれけんとも思へど不審に堪へざれば。猶近傍を隈なく探索せしも。遂に其行衛を知るに由なければ。拙者も實に力を落し。折角御救助申せし甲斐もなく御面目次第もなきとなれど。全く猛虎の餌食となられしとも限らねば。或は此際又惡漢などの手

に罹り。再び憂目を見られしやも計り難く。殊に企海府使が懸賞して美人を探ぐる風評も高ければ。萬に一つ是等の手に疑ひなきにもあらねば。猶は御相談も仕らん爲め相伺ひたり。拙者が鹿忽の罪は幾重にも御寛恕あれ。……と事理を分けての物語りに。英陽は或は喜び或は悲み。先つ厚く其親情を謝せり

英陽は之より玄風遭難の顛末。母が横死の摸様など落もなく語り。熟々柳氏の風采を視るに世の平、凡の人に非らぞ。當世に志あり何處へか赴くもの。無論我志を語りて然るべき人ならんと思へは。悲嘆の中にも亦考ふる所あり。安氏の妻に命じて火

酒など出さしめ。鶏を割て肴となし。英陽は慨然として云ひける樣。……素より此度の災難は我身に取りて愁傷に堪へぞ二人ともなき妹香蘭も艱苦の中に育ち漸く妙齢にもなりたれば。母は追々然るべき婿を撰びて安心させんものと思ひしは水の泡。其身も消へて今は行衛も知れぬとなりしは遺憾に堪へねどば。拙者とて當世に望みあるもの。御承知にや候はん。父は梁山の郡守を勤め仁政の聞へさへありしに。今の東萊府使尹定建の爲めに讒訴せられ。怨を呑んで海島の配所に死せり。拙者當時弱年ながらも。遺恨骨髓に徹し。同じ島に流竄の身となり日頃父と入魂なりし。金氏の黨類鄭朱

明に薰陶を受けつゝ。當今の形勢を窺ひ知り。鄭氏よりも亦大に諭さるゝ所もあり。意へらく到底我國の獨立は今日の弊政を改めざる可からず。之を改めんには先づ尹族を斥け。弘く英才を求め。歐米文明國の政治を取捨し。傍ら教育に。殖産に。軍備に。大に之を擴張せざれば。他日東洋に孤立して。外列國に相對す可からず。今にして志ある士と結びて聊か謀る所あるべしとて。此處をば賴り來たりしに。圖らずも不慮の災難に出遇ひ。折角の大望を打忘るゝ計りに迷ひしは。偖ても〳〵愚かの至り。承れは貴下も當世に御志ありてこそ斯くは旅路に就かれたれ。誠に賴母しく候へば之を御緣に御引

立ありたし……とて折入りて頼みければ。柳氏は膝立て直し。今承れば天晴の御宿願。拙者も同じ志。御妹の事も等閑ならねども。彼は私事此は天下の大事。夫に就ひては暫く御密談申すへしとて傍りの障子閉塞ぎて何やらん久しく密話あい。果ては柳氏の口調にて。……然らば御鳳志に従ひ暫く御邪魔致すべければ。明日にも共に崔氏を尋ね協議一決の上。貴下は金海に下らるべし御待受申さん……

第十二　桃園會

幾株の桃李既に黄熟して小丘を蔽ふ。樹下榻を置れ。氈を布き茶を煮。香を焚き。三個の縉士鼎の如く倚れり。這は率禮村崔成建の後園なり。此村は院塘

の東南に當り、池洞村と相列び共に兩班の多く住ふ所なり。崔成建と云へるは村内にて有望の紳士。頗る慷慨の氣あり。嘗て聞く父は國事の爲めに寃罪を蒙り。遂に果敢なく牢死し。一時は其家財を官沒し其遺族までも。誅戮せられんとせしに。成建の伯父に李司權と云ふもの。聊か廷臣に縁故あるのみならず。元來富豪の人なれば。崔氏遺族の爲め莫大の黄白を當路に獻して。其罪を宥さるゝを得たりとて。成建は何となく當世に不滿を懷きける者にて。彼の金氏の殘黨とも目せらるゝ開化主義の人々には交際もあり。亦人望もありて。近來政府の處爲に對しては頗る反對の意見を有し。改革の念

甚だ盛んなる人物なり。崔氏は嘗つて其名を聞き平生大ひに欽慕し居たれば。此日英陽を促して共に之を訪ひ。互ひに時事を論せしに。其意見恰も符節を合するが如く。殊に成建は清國が朝鮮を以て屬國視し。袁星使をして縱横に干渉せしめ。却つて親しむ可き日本を離隔するが如きは。實に是れ朝鮮國をして死地に陷いらしむるもの。亡國たらしむるものなりとて。痛たく清國との關係を憂ふるが如く。柳氏等其卓見に感ド。夫れより目下之れに對するの計畫を語らんとせしに。崔氏は押止め。……此處にては御無用なり。兎角壁に耳ある世の習ひ。昔蜀の玄德は關羽張飛と桃園に會し義を盟ひし

例しもあれば。幸ひ後園に花こそ過ぎけれ。實を結びたる桃李の林あり、茶點香の用意も出來居れば。彼方にて緩々密話かんとの氣安きに如かじ。……とて二人を促し。偖こそ後丘に會談するものなり三人の談話は極めて秘密なれば悉く聞き得難きも。清風時に林間を掠めて彼等の語を漏しけるに。

崔氏　昨今ゴタ〳〵せる東學黨も場合に依りては利用の出來ないものでも有まい何を云ふても彼はどの勢力は容易に作れない。

柳氏　實に左樣だ。……然し未だ彼等の方針は定まらぬ。今では烏合の有樣なれば。少しく時節を待て時宜に依りては貴下（崔氏を指す）黨中に乘込み。回天動地の働きを見せるがよい。拙

者は早く漢陽に入りて廟堂の動靜を察し。機を視て畫策する考だ。崔氏夫はそうと未だ少しく猶豫のあると、朴君は令妹の行衛を尋ね度きも骨肉の情尤に思はるれは。同君は至急旅立たれ成るべく速に歸村せられたし。夫迄は柳君安氏の方に居らるゝ方が。拙者の爲めにも好都合だ　朴氏此際如何とは思はるれど。左樣願はるれは双方の仕合せ……一同萬事は近日三人再會の上……とて。笑の聲と共に客の二人は暇乞して歸りたれ。林間唯鵲鳥（朝鮮各地此鳥多く日本人之を朝鮮鳥と云ふ）の桃李を啄むもののあるのみ

第十三　因果報

斯くて朴英陽は柳氏を敬ふと兄の如く、成忠にも

事の理由を告げて。柳氏の事を呉々と頼み。聽て妹香蘭の行衛を尋ねんとて。金海府を差して旅立ては。柳南陽は心苦しけれど暫時の事なれはとて。安氏夫婦が正實〱しき饗應を氣の毒げに受けつゝ。折々率禮村に赴き崔氏の家を訪ひ。尚は種々と協議を盡し夜さへ最と更深けて還ることもありき。然れども南陽は盟て事の成否を見るまでは。日本人たることを告げまじとて何れにも韓國の由緒ある縉士なりと思はしめたり

柳氏は心ならずも朴英陽の留守を預り。安氏夫婦の世話を蒙り早や一年を過ぎたれども。朴氏よりは更らに何等の便りもなく。唯聞ゆるは東學黨の

噂のみにて。元來この東學黨と稱するは。儒佛神の三道を混じたる一派の宗徒にして。一昨年頃より忠清道近傍に起りて沿道の人民を煽動し。外人排斥の運動を爲し。大勢漢陽に迫り擧廷爲めに震恐し。百方説諭の上漸く之を解散せしめしも。尚は報恩地方に立籠り旗幟大に動かんとし。朝廷よりは鎭撫使を差向けられたるも。更らに立退くべき色の見へざるのみか。黨勢愈々増張せる摸様なりとの事なれば。柳氏は取敢へず崔成建を率禮村に訪ひ。最早猶豫すべき時節にあらず。朴氏の歸來を待つべきも是非に及ばず。拙者先づ報恩に赴き其地の事情を探り。進んで漢陽に乘込み申すべし。貴下

願くは拙者が途中よりの報道を待ちて進退を決せらるべく。夫迄朴氏歸村の摸樣なければ。最早詮方もなし留守安氏に事傳へ賴みて。夢々時機に遲れ玉ふと勿れ。……とて急ぎ別を告げて出でけるとぞ。實にも世に賴母しき大丈夫にこそ
柳南陽は時勢の漸く必迫せるを見るより。英陽の歸來を待つに暇なく。安氏にも事の由を告げ。多日の扼介の恩誼を謝して先づ報恩縣を心ざし。此頃は尙は大江に水あるべし。江流に沿ふて上らはやとて。玄風縣に至りしに。此處は商估繁榮の地にして東に琴峯山聳へ。其西下に治廳あり。柳氏は市中など見物し乍ら。午山村に出で洛東江流に舟せんと

せしも。暑中のとて水淺ければ是非なく江岸に沿ひ。此處の綠蔭。彼處の水渚なぞに涼を納れ。四方山の感慨を載せつゝ。其翌日沙門にぞ着きける。沙門は大邱營門の鎖鑰に當り人煙稠密地方有名の市場なれば。柳氏は他日の爲めにとて頻りに觀察を凝し。其日も早や暮方近くなりたれば。急ぎ之より大邱に至らんとて野路を歩りしに。暗夜の事とて最と暗瞻けれど。風さへ涼くして朝來の暑熱を忘れたるが如く。唯飄々として行く程に微かに聞ゆる女の泣聲。ハテ合點行かぬと。此暗夜と云ひ然も此寂しき野原に怪しの聲。必定例の惡漢どもの所業ならん。イデ懲しめ見せんと用意の短劍を背

面に匿くし。逸足早く駈け行けば。覆面したる二個の暴漢。年若き一人の處女を縛り上げ。……甲泣いても叫んでも最うお母は極樂淨土。其方丈は助けてやる乙其代りに難有く思つて此處の監營に。夫れアノ尹鎬壽どのといふ言聽けば宜い。……と云ひ聽かすれば處女は唯泣叫ぶのみ」

柳氏は此方の艸叢の裏に陰れ乍ら彼等の言語を聽きつゝ。ハテ不審や大邱の監營に金海の尹氏があろうとは知らざりき。又しても懸賞沙汰か惡き尹鎬壽奴と。早や飛び入らんとせしに。……甲忘れもせぬ去年の六月。玄風で好い代物を召取つたと思ひしは夢の間。惡の報ひか龍集で乙二人も共に水

底の藻屑とならん危ひ場合。ヤットの事で助つて。
甲重て加へて飛音峴の災難。負傷が愈へる。か愈へぬ間に嬉しや運よく尹鎬壽どの、恩週で。今又此處で甘い汁 乙今夜も之れで十貫文明日の賭場では威勢も強ひ。……と問はねど語る舊惡業。柳氏は益々腹打立て。彼奴こそは去年香蘭を拐せし惡漢なるか。死も還らで復た此惡業。飛音峴の災難とは心得難き事なれど何れに致せ惡の報ひ憎さも憎しと大聲揚げ。暴賊其處動くな。覺悟せよと。短劍眞向に振翳し。賊を見掛て斬込は彼等は不意を擊れて狼狽廻り。泣入る女を抱へ乍ら敵對もせぞ遁走る。後追ひ駈けて斬掛け〱。二人の賊は數ケ所の痛

手に弱り。縛れる女を打捨て傍へに瞠と倒れける
を。柳氏は血走る眼怒らして。……汝等玄風にて我親
友朴英陽の母を斃し。其妹まで奪ひ。剰さへ龍巣窟
に陷り一命も危けるに。尚懲もせぞ今夜の所業。惡
みても餘りあり。速かに往生せよ。……とて懐劍さへ
差し貫けば。程なく息絶へたりしぞ氣味よけれ

第十四　野邊月

惡漢二人は思ふ存分斬倒したれば。柳氏は彼の處
女の束縛を解き。……何れの御娘子か知らねど圖ら
ざる御災難嘸かし驚き玉ふらん。幸に御怪傷もな
く此上ながらの仕合せ。……と勞はれば處女は正体
なく泣き伏しける。時しも月は飛屹山の頂に出で

野邊の一面を照せば。此方の茅叢の中に何やらん蠢くものあり。月光に透かし視るに豈に圖らん三十路餘りの婦人なり。彼の惡漢に毆打かれ。一時氣絶なせしも今漸くに息吹き返しけん。苦しげに顔を上げ娘や白蓮よ〱と聲も微かに呼びにける柳氏は初めて處女の母人あるを知り。泣き入る彼れを促して此方へこそ導きしに

處女 ヤア御母上さん助ましたか。お氣を慥になされませ。惡漢は何方様が斬殺して下さりました。妾も無難で。ヤア御母上さんお氣を丈夫に……と涙ながらに耳許近く叫びければ。母人も愈々蘇へりけん。ガツパと身体を起し。兩眼を見開き。

母 白蓮よ此母も助つた。御身も

無難で。ヤア嬉しやる。何方樣か生命の親厚く御禮を申してや。……と云はれて處女も初めて淚を拭ひ。……思ひ掛けもるき今夜の狼籍。死ぬる生命を御助け下されし御禮の申し樣るし。妾母子は世を忍ぶ身の果敢るさ姓名をも申兼ぬれど。譯ありて此年來報恩の片傍りに閑居ひ針の莚に坐れる思ひ。重て加へて昨今の騷がしさに身も世もあらぬ心地すれは。母子二人は心を決めて尋ぬべき人ありて。南海縣の珍島郡とやらんへ遙々の旅路。圖らずも此災難に出遭ひ。母子二人の胸のうち御推察下され……とて母も諸共拜まぬ計りに再生の恩を謝しければ。柳氏は最と氣の毒げに。……ツハ怪しからぬ御禮

は御無用なり。旅は道づれ世は情け。幸ひにも御兩人とも別に御怪傷なく。何よりも重疊。然るに今承れば珍島に尋ぬる人あり。世を忍ぶ御身とて之れに赴かせらるゝは。少しく心懸り實は拙者の親友にも珍島に永の歳月流竄の身となり居れるもの。昨年赦免の沙汰を蒙り。母子三人玄風縣に上れる途中。不思議や今夜の惡漢に出逢ひ。母は其場の横死。妹は一旦彼等に拐されしも。拙者途にて之を救ひ。夫等の緣より懇意を結び兄弟の交り致せるものゝ話に。彼の先年金氏の亂に與みせし鄭朱明と云へる人も。彼の島にありて深く交を結べりと聞けり。若しや其鄭朱明とやらんの御親緣には非ら

ぞや。……と星を差れし一言に。母子は驚き且喜び。斯く仰せらるゝ上は包むも何の甲斐あらん。實は鄭氏の妻子に相違はなけれど。變亂の當時父が注意の爲めに。妾母子は竊かに身を匿くし。全く他人の如く致せしも。若しや其事の分りもせんには今にも如何なる憂目に逢はんも計り難ければ。夫のみ心に掛りて夜の目も閉り得されば。寧のとで父の許に至り行末の相談もやせんと思ひたるなり。然るに我父に御交りある其方の親友なる貴下の爲めに一命を助かるも何かの因縁でと。貴下の御姓名は如何に侍べるや。……とて熟々柳氏を打見る其顔の艶かなる。薄が野邊の月影には最と物凄ぐ

見へり
柳氏は唯心ざす所ありて旅せる南陽と名るものなりとのみ告げ。兎も角夜も次第に深くるのみならぞ。斯る野路に長居は無用。此事知れなは監營の尹氏も心惡き奸物。如何なる椿事を惹起さんも知るべからぞ。今夜の中に何れへか遁げ延び。明日にも緩々相談致し参らすべしと。無理に二人を促して沙門の方へと引返し。再び玄風さして行く中に夜もほの〴〵と明渡れり。然るに遙か前路より周章狽狽き乍ら馳せ來るものあり。近づきければ思も依らぬ安成忠なり。互ひに驚きつゝ別けて成忠は柳氏が二人の婦人を伴ひ早や歸路にありける

を怪しめども。急ぎ柳氏に告ぐる所用のあれば。是等の事由を問ふ暇なく耳に口寄せ實は云々なりとて。昨夜東萊より探偵らしきもの來りて香蘭の行衛など尋ね。又貴下及び英陽の事まで念深く。問ひ還りしより。夫婦は合點更らに行かねど。萬一の變事ありては臍を噛むも及ばず。貴下も未だ遠くは至らまじ。今朝追掛けて事の由を告げ相談せんものとて態々參りしに幸ひ。茲に邂逅たり。如何にぞやと恐るゝ密語ければ。柳氏は莞爾として夫は格別懼るゝ程の事にはあらじ。却て香蘭の蹤跡を知る手掛りともならん打捨て置べしとて。聽て彼の二人の婦人を紹介して前夜の變など語り。且此

婦人どもは英陽に因縁あるものなれば暫らく其家に忍はせ彼れが歸來を待たしめよとて。障らぬ体にて頼みければ成忠は折角の注意は案に相違し復た扼介者を頼まれたりと心には思へど。誠實なる人物なれば快よく承諾なし。早や二人を從して立別れんとせしに。白蓮は母と共に柳氏に對ひ幾度か恩を謝し。盡きぬ名殘に兩の袖を絞りて右と左に別れ行く

第十五　義人の信

東學黨の名は此頃より愈々閭里に風聞高く。報恩に聚る者のみにても。拾萬と稱し。又金羅慶尚兩道にも其黨類多しと云ひ。牛追ふ牧童。子供守る娘子

までも。其動靜を口にせざる者なき迄に至りしも。彼の朴英陽は未だ歸村の摸樣もなく。亦何等の便りもなければ。崔成建は獨り心を惱まし。今一二ヶ月も音沙汰なければ。最早單身報恩に出向きて大に爲す所あらんとて。窃かに旅の用意などなしつゝ。早や一月も經て。此頃は秋の夜の月さへ最とゞ冷へ渡りて鴻雁の聲聞へければ。成建は坐ろ感慨を浮べて窓下の机に倚れ乍ら。何やらん考へつゝありけるに。忽ち誰れとも知らぬ男。椽端に一封の書信を拋げ込み。逸早く遁げ去りて其影を失ひければ。成建は合點行かざれども。若しやと思ひ乍ら手に取上げ見れば。其封書は匿名なれど正しく見

覺へあれば。取敢へず封押切り披き見る。其文に曰く、

一別來疎濶足下愈御勇健奉欣賀候。拙者先月院塘出發。不計途中に於て豫而朴氏噂有之候珍島流刑中の鄭朱明妻子が危難を相救ひ。一先玄風近傍迄立歸り候處折よく安氏に出會。幸ひ妻子共相托し直に報恩に向ひ候途中。又大邱監營の捕吏に追はれ一時捕縛の上監營の獄舍に繫れ。不圖艱難相極候得共幸ひ例の手段を以て脫獄仕り。漸く報恩に到着候處。右樣之次第に付此處に於て長居は甚だ危險に被思直に漢陽に罷越候。報恩にても東學黨の動静は略相探り候に。此

頃黨勢陰然大に振ひ再擧の計畫相熟候摸様に有之。素より頑固なる黨類に御坐候得共。尹族排斥之義は彼の本旨にして此邊は毫も我々の趣旨と相違無之旁々賴母敷被思候場合。唯今當漢陽にて廟堂の動靜等種々相探り候に。近來外交上多難。曩日日本と防穀談判の事有之。今又露國と何事か交渉之事件差起り。所謂内憂外冠交至り。廷臣一同當惑相極め候場合。不相變例之袁星様は彼蚌鷸之爭漁夫之利と窃に覺悟罷在内々煽動之摸様。愚かなる廷臣共一向無頓着彼國任せの勢に有之。實に國家危急存亡之秋と被存候。就ては拙者共聊か非常の手段も相企度決心も

有之候得共到底豫期之如く大目的相達候義は無覺束存ト目下先づ差扣へ居候。然處如前陳東學黨の狀勢は隨分見込相立。豫而御談申上候通之を利用候時は第一着の權謀を以て終局の希望を達する義に有之。目下廟堂に於ても內外多事の際旁々好時機とも被存候に付縱令朴氏未だ歸村無御坐とも。貴下は至急報恩に御乘込相成度。拙者は當地に於て大計畫之義も有之。一擧相應トて以て大目的を貫き可申日も最早不遠。御出發之節は朴氏に歸來之上は至急驅付け候樣御申殘し可然。何れ愉快なる戰場若くは平和の公堂に於て御面會可申上。紛雜之際窃に奉促

御決心候匆々不盡

秋

八月十一日

於漢陽　柳南陽謹白

崔成建君

貴下

二伸

安氏に御面會之節は。彼の鄭氏妻子之義は朴氏歸村迄相留め候樣。呉々も御申付被下度候

成建は讀了て慨然按を拍きて曰く。義なる哉柳氏。膽なる哉南陽。彼れ幸に監營の獄を脫す宜しく其言の如く報恩に在る可からず。我れ實に之れが任

なり。時至れり機熟せり。一日を空ふし難し。朴氏家を出でゝ既に一年有餘。更らに音問なければ彼が生死も亦知るべからず。況してや其歸來に於てをや最早之を待つも甲斐なかるべし我れ幸に一人の弟あるのみ一家は之れに托しなば更らに懸念する所もなし速に行に上らんに。先づ柳氏の傳言あれば明日にも安氏を訪ひ鄭朱明とやらんの妻子にも面會し置くべしとて。翌朝院塘に至り安氏にも柳氏の傳言を告げ且出發の由を語り了て鄭氏妻子にも面會なし百方之を慰諭し聽て別を告げ去り。一兩日を經て行李輕裝飄然として李禮村の家を見捨てぬ

第十六　抱病心

茲は金海府の新安村とて。昌原の巘山飛音硯の東下半腹にある一小部落。其片傍りの荒屋に。昨年何時の頃よりか彷徨きたりて。此處の老婆の親切なる看護を受けゝる。未だ年若き病客あり。今しも主人の老婦は汚穢ものゝ洗濯にとて近傍の溪川に赴きし歸路にや。頭上に白き衣容れたる器を戴き（衣類多く白色なるを以て洗濯ハ實ニ婦人の一務となす若し男子久しく汚衣を着くるものある時ハ其家婦人の恥辱となる故ニ洗濯ハ最も巧みなり）（り又婦人物品を運ぶニハ必ず頭上ニ於てす容器ニハ桶類を用ゆる稀なり）此家の門頭に立ちて。……

老婆　今歸りました今日は病氣は如何です。最ふ一年餘にもなると故快方ならねば實に難儀ですね―

……病人の男　左樣です永々の病氣計らずも御厄介を蒙

り、何んと御禮の申樣もなし。實は兼々申す通り院塘の方に友八なども約束の事もあり。夫れも氣には掛り。妹の行衛探索も其儘にて色々と心を煩せども何を申しても斬られ所が惡かつたと見へて。今日が今日まで足さへ立たず。難儀致しましたが。不思議にも今フト柱を押へて立上れば。足の痛みも忘れた樣に一足二足苦もなく歩めるとなりしのみか。心持ち迄遽かに變りて快よく。合點の行かぬとなれど。是れも其身の親切が神佛に感應しての事と猶更難有 思ひます。最ふ之では五六日中に旅立つとが出來ましよう……」

朴英陽は妹香蘭の行衛を探らん[も]のとて。暫らく

の暇を乞ひて同志に別れ。洛江に沿ふて金海府に下らんとせしに。途中にて少しく心懸りの事ありて方向を變へ。昌原府を差して赴き先つ彼の馬山浦ならんどを探りたれども。更らに手掛りなければ沿道の村々など。隈なく探索し乍ら。金海の方にと下りしに。或日兩府の境界なる。飛音峴の嶮路に差掛り。飛巖突兀として足を容るゝに最も困難を極め圖らざも途中日は暮れたれども秋の夜の朧月さへあれば。羊腸折りなる阪路を歩りて早やその絶頂に至れるに。傍への木蔭に何やらん人の聲しければ。此山中に今時頃何の業なす者かは知らざれども。何れ怪しき曲漢ならんと。窃かに此方に立

聞するとも知らず。二人の壯漢は今日しも賭場にて勝ちたる金か。但しは如何なる惡錢か。互ひに算用し乍らに之を分配する摸樣にて。甲 時に(此時巨指を出し)巨指はヱライ出精らしい。乙 夫れでは何處かへ轉任か。甲 左樣らしいが未だ詳しい事は聞かない。乙 若しそんな事なら我々等一處にして貰ふぢやないか。……と互ひに甘き相談を朴氏は聽て是れぞ必らず例の曲者妹の手掛りならんとて。出し拔に一刀スラリと拔き捨てゝ二人の中に斬入れは彼等は狼狽乍らも何か短かき刄物を翳し。右左に抗抵たれは。朴氏は得たりと斬結び。一上一下虚々實々勝負も見へずありけるが。忽ち一人の曲

者は負へる痛疵に臆しけん隙を窺ふて一散走り。次て一人も後追ひて雲を霞と遁げしより朴氏は如何にも殘念なり追打にやせんとて走らんとするに。フト見れば右の脛より滴る血流は傍りの艸を染め何時の間にやら手傷負し居れば。口惜しやとて衣引裂き強く疵口を結びて前路に下りしに。夜も痛く深けゝるより宿るべき所もなく。漸く村外れの荒屋に一夜の宿泊を求めしは彼の老へる寡婦の家なり

偖ても此老婆は朴氏の忠僕たる安成忠の姉にして成忠が尚は梁山郡にありて朴英駿の家に仕へし頃情夫狂ひなし其家を逐天して行衛さへ定か

らざりしもの。其頃情夫と共に金海府に來りて詫住居なせしも。夫は善からぬ業ありて刑罰にまで行はれ。安氏の姉は獨身の賴る所もなきのみか。年さへ既に五十路を過ぎて深く昔日の遊逸を悔ひ。遂に此村に移り他人の賃仕事など爲し。微かなる煙を上げ早や七八年も住へるものなり。昨夜圖らずも旅の若者に一夜の宿を借せしに。其者の負傷強く痛み今朝よりは腫上りて起も得ず。氣の毒なりとて種々介抱なせしも其効更らに見へず。一日と過ぎ二日と過ぐる中。主人の老婦はフト朴氏が巾着（朝鮮人は平常下腹の邊に必らず巾着を着く）の繡地を見て不審の色あり。

老婆……若し貴下安成忠と云へる者御存知なきにや。

……と突然の問に朴氏は驚き乍ら。……夫は拙者方の僕の名前。……と云へは老婦は一層驚愕と慚愧の色を呈し。……去らは貴下は朴英駿とやらんの。御子息ならぞや。貴下の巾着の繡地に覺へあり。曾て弟成忠が御主人より頂戴し。妾が貰ひ受けたる切地と寸分違はぬ縞柄なれは合點行かぬと思ひたるなりとて過越方の懺悔話に時を移し又成忠の事など尋ね。二人は不思議の思をなし。共に喜び乍らも老婆は別けて世話甲斐ありしとなり。世には惡業は出來ざるなりとて。深く我身の行末など案じ恐れて之より益々親切を盡し偖こそ斯くは永き厄介を蒙りたるほどを知らる

第十七　後門の狼

香蘭は龍巣窟の危難を免れ。恩人柳氏に伴はれ。人目を避けて彦陽に迂回し雲門峴に至れるに。圖らざりき。猛虎の爲めに。柳氏は今にも嚙裂れんと思ふ計り危き場合に。豫て聞き居しとあれば手早く用意の火鐵を以て艸叢に火を點ト。後をも見ぞして遙かに山の半腹にまで遁げ延びしも。柳氏は如何なりけんと身も世もあらぬ思をなし。恐る〳〵此方の巖間に潜み程經けるに。何れより來りけん旅姿の男女二人。男は五十前後。女は三十五六にやあらん。全く夫婦の者の如し。香蘭を見るより近づき來り嘸や驚き玉ふらん。何處の方かは知らねど

も御良人の方にや。云々の難に遭ひ御連を見失ひたりとて。此麓なる酒幕に待詫び居れり。我等も麓に歸るもの御供仕らんとて親切の言語に。香蘭は夢にだも詐言とは知らぞ。地獄にて佛に會ふよりも猶は心嬉しき思をなし。今までの恐懼を打忘れて聽て麓に着き。或る穢らはしき酒幕の一間に件はれしに。這は抑も如何に戀しき柳氏のあらざるのみか。最と恐ろしき壯漢ども濁酒汲み代しつゝあれり

此壯漢どもは皆博徒の連中にて心善からぬ輩なり。然るに此日縉士らしき男狼狽しげに山より走せ下り。門邊に起ちて山中にて云々の危き目に遇

ひ同伴の若き婦人を見失ひたり。心當りなきやと尋ぬる者ありたれば。這は屈究の獲物なり、此嶮しき山坂のとなれば女の弱足にてはヨモ未だ折下る筈はなし必定恐ろしさの餘り何れの樹蔭にや潜み居んとは思へども。故意と。……左樣な婦人方はぞんじ申さぬ。……と應へければ縉士は。最と本意なげに下路を差して走けるを見止め。彼の男女二人の同類を使嗾して案の如く欺き伴ひしものなり,頃日彼等東萊にて傾城を求むる由を聞き。金海の傾城なりと詐り賣らんものとて。偖てこそ斯くは巧術けるを知ぬ香蘭は。唯前門に虎を防ぎて。後門に狼に會ひたる心地し。アヽ我が身はど因果なる者

はなし一度ならず再度の災難生きて此世に生活
らへんよりは寧ろ死するに如ドと覺悟は極め乍
ら。回想せは未だ母上の生死も知れぞ兄英陽には
如何にしけん信さへ聞かざれは。今茲に死にたり
とて犬死同樣。況して我父は世に怨みさへ遺して
死去りけるを其仇さへ報ひぞしては縱令女とは
云へ一分立たぬと。又も健氣なる心を起して氣を
取直し彼の惡漢等が爲す儘に任せ。眞逆の時の決
心と覺悟を定め居しに。彼等は其翌日香蘭を欺き
轎輿に乘せて東萊府に送り。或る傾城買の手に幾
何かの代金を以て賣り渡しぬ
此傾城買は數多の傾城を蓄へ養ひて之を營業と

なせるものにて。此頃容姿よき傾城三名まで此處、
の府伯尹定建が抱へんとする由を聞き。良き金儲
なりと思へど。相應しき者なく。斯くて弘く之を買
ひ募れる次第なるが。今香蘭を得て其容色の艷か
なる。昔の楊妃西施も三舍を避くべきのみか。起居
振舞までも世の普通の傾城とは事變れは大に喜
び。先づ香蘭の名を改めて幽谷と名つけ。程經て府
伯の許へ遣しけるが。香蘭は思も依らぬ傾城の賤
しき社會に沈められしとの悔しさは言ふ計りも
なく。契て肌身は汚すまじ唯姑らく人の酒席など
に招かるゝ中には兄英陽にも會ることもありな
んとて。夫のみを樂みて浮川竹に身を沈めしに。又

計らずも府伯の邸宅に還るゝととなりけるより香蘭の幽谷は如何はせんと煩ひしが。徴かに聞けば其府伯は正しく我父の仇尹定建。這は抑も如何にと一時は驚き逡巡しに。健氣の香蘭何か心に思案し乍ら。聽て進んで彼の邸宅に趣けり

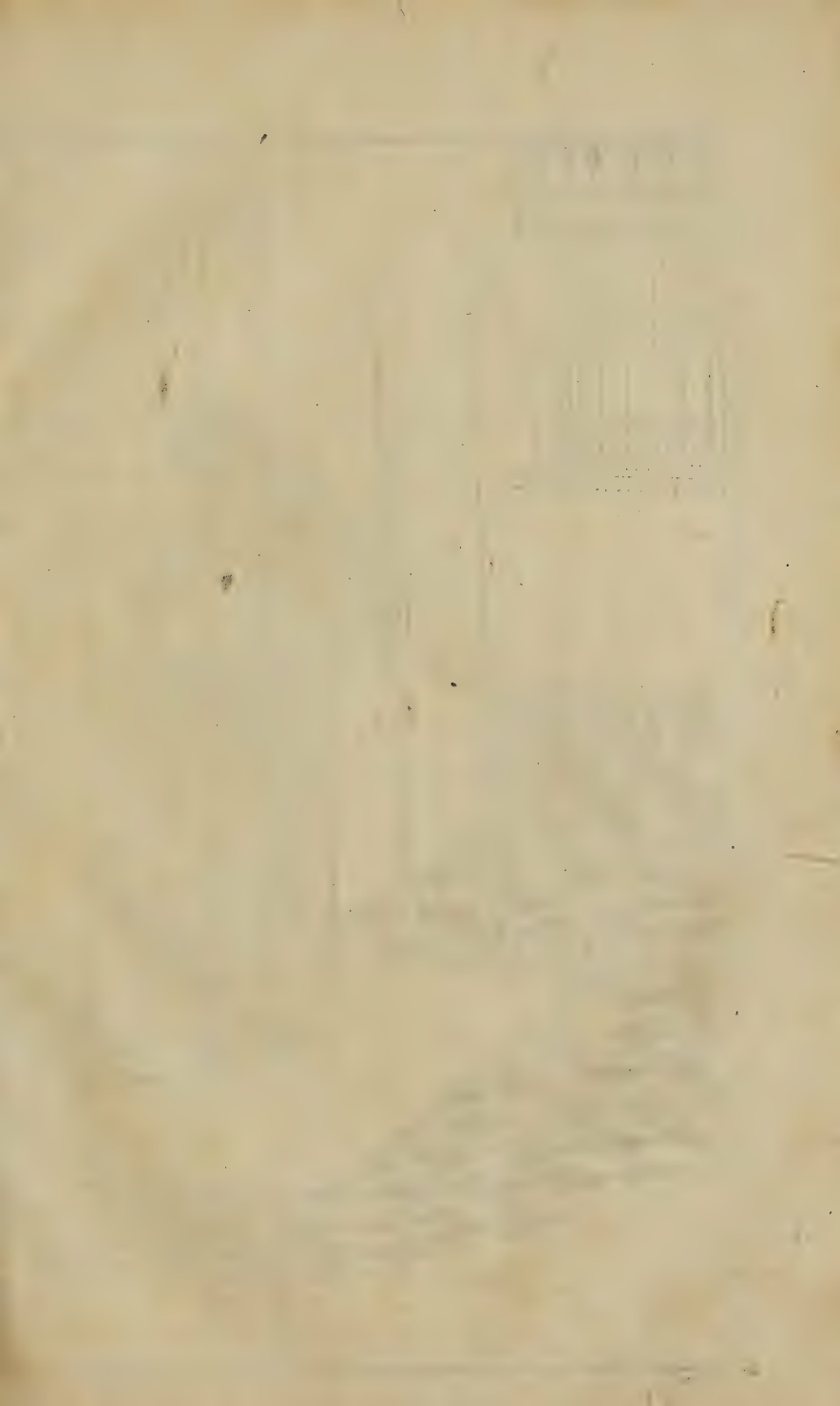
第十八　復讐邪

東萊府伯尹定建は。數年前梁山大守朴英駿を讒し之を貶けしよりは。爾來誰人も其非政を難ずるものなく益々民の膏血を汲收し。果ては日本館より買入るゝ物品にまで。途に徴税所を置きて之れに重税を賦課するなど狡猾非道の行を爲し。已れの懐を暖むると計りなりしが。此頃年老ひて既に耳

順を過ぎけるに俄かに。淫酒にさへ沈り官邸には數多の傾城など召使ひて常に長夜の宴を爲し。歌舞管絃曉に徹するとも數回なるに。此程より召抱へし傾城幽谷が天性の美人にして。其愛嬌の毀るゝが如きを見。深く之れに眷戀を寄せ酒宴の折などは常に左右に侍せしめ。少時も其側を離さぞ憎らしき振舞などあるに及べり

香蘭の幽谷は謀計る事あれば。故意と媚を呈して彼が機嫌を取り。少しも敵視の顏色も見せざれば。定建は二つなきものと思ひて。果ては汚はしき。擧動などありけるも。幽谷は更に怒りし風態もなく。

……戯事遊はされては困ります。……アノ昨日梵魚寺

の妙連さん（尼の名）が見へられ。少々佛願を致しましたから夫ばかりは御免下さりませ。……などゝ風に柳の如く受け流し。五月蠅き月日を送りしに早や一と歳の日も過ぎにける。此秋の頃より定建は附けつ廻はしつ幽谷に。無理なる色情のみ挑みかけ。夜に日に別けぞ益々忌らしき振舞に及ばれけるより。幽谷も今は忍び兼ねてや一二度は無情なく刎ね付けるに。定建は猶は懲もせぞ。今宵は幕下の官吏などに耳、吹き。何か計畫ることのある摸様なれば。幽谷の香蘭は最早乘つ引きならぬ場合のみか時節も茲に到來せりと。既に決心なせしも然あらぬ体にて。常に變らぞ定建の側に侍り。他の傾城なぞ

と笑ひつ興じつ酒など勸めつゝありしに。夜も早や更深けて遠山寺の鐘は三更を報しける頃案の如く幕下の官吏どもは醉に任せて。否める幽谷の手取り足取り。定建が寢房にこそ擔き入れければ。此處には空寢の定建がドッカと起上て。……幽谷最う斯ふなつては百年目。嫌でも應でも今夜は此方の掌の物。温良しくいふ言聽け。……とて強て本意を達せんとしけるを。今までは菩薩の如き幽谷も忽ち夜叉の如くに眼怒らし。……女と見て猥褻の振舞。默て居れは際限なし。汝下百姓を苦しめ剰さへ、我父英駿を冤罪に陷れたるを忘れたるか。父の復讐覺悟めされ。……と短劍逆手に持ち乍ら。胸倉攫んで

突き通せは。拳も入らん計り。定建はアナヤと思ひし間隙もなく。一言も得立てぞ虚空を攫んで死してけり。此騒ぎに彼の幕下の官吏なども鈍くも何れへか遁げ去り。人の無きを幸に。幽谷の香蘭は喜んで天を拜し。珍島の方向に哭し首尾よく怨を報いたる旨を告げ。聽て庭園に飛下りて四方を見れば暗の夜の黑白も分けぬ眞夜半頃。是れ屈竟と石塀乘り越へ後への山に遁れしに。早や庭内にてはガヤ〳〵と打騒ぐ音のみ聞ゆれは見咎められては大變なりと血刀拭ひて懷中に收め何處を當ともなく夢の如くに遁げ去りぬ

第十九　再會涙

物見高き此國の風習とは云へ。今朝より數多の人は我も〳〵と洗兵門の外にと馳け來り。何やらん見物しつゝ評判區々なるは。東萊府の出來事なり。然るに一昨夜府伯尹定建は俄かの病にて死去せりとの披露ありたる折なれば。人の疑念も一層なり。抑も人々は何物か見物しけん。門の右側石壁の上に貼紙あり其文に曰く

公示

一傾城幽谷　一年齢拾七歳　一容姿艶麗

此者大悪有り蹤跡を失す撿出の者賞三拾貫文

捷捕の者賞五拾貫文

冬十月三日

喧囂しく打騒ぎ見物なせる群集の中に。今しも何れよりか歩み來たれる壯年の紳士は喪中にやあらん。麻の衣を身輕に着け大笠を傾け彼の掲示の文を幾回か繰返して讀み下し。幽谷〳〵とて微かに二三回も口にし乍ら。深く思案しつゝ。ハッタと膝打ちて最と太き浩嘆の息を衝き。双瞼に玉涙を浮べ人に見られトとて密に白紙を以て拭ひ。悄然として門内に去れり（洗兵門内を通りて他に出つるの路あり）此紳士は疑もなく朴英陽なり、英陽は病氣日を追ふて快方に趣き。歩行にも差障へなきに至りたれは大に喜び老婆にも積る謝禮を爲し。他日歸來の

日は弟安氏に再會の周旋をも爲すへしとて聽て新安村を出で丶漸く金海府に着し。妹の行衛に就き府使の動靜など窺ひけるに尹鎬壽は既に昨年の秋頃とか數多の賄賂を當路に獻ド大邱監營に轉せし由にて今は溫厚なる金永寧となん云へる者後任となり官舍の中婦人の笑聲を聽かずとの事なれば。朴氏は其目的大に相違し。去らば大邱の方尋ねんとも思ひけれど。遭難の地は彦陽の雲門峴なれば或は燈下却て暗如たる譬の如く。東萊近傍こそ手掛あるべしとて。洛江を渡りて斯くは此處に彷徨ひ來たれ。然るに彼の貼紙の文面を見るに年齡と云ひ。容姿と云ひ符節を合するが如くな

れど。傾城とあるは如何にや幽谷とあるは不審と思へど。雲門にて何者にか拐かされ身を浮川竹に沈めしも知れど。幽谷は香蘭に縁みある名なり且つ道路の風説には府伯の死は病氣にあらず。召使ひの傾城に刺れたりと云ふ。尹定建は我父の仇なり。我家の讎なり。妹香蘭も日頃之を怨めり。此數個の疑點より考ふれば。必定妹の所業なり。懸賞して其行衛を尋ぬれば分らざるともあらド。分りし上は何れ死罪は免れド。此兄までも共に連罪は當然なり。アヽ健氣なをしてけり生命ある間に一回邂逅ひ遁れる丈は何處までも匿まい見んとて未だ慥かに妹なりとは定かならねど。早や心には夫と

假定めて遠くは行かじ何れにか潜み居んものと。彼の蓬萊藥泉などに立寄りけれど湯守の外に浴客もなし。熟々思ひけるに梵魚寺こそ必定彼れが匿れ處。回顧せば此春新安村に尋ね來りし尼の妙蓮も慥か梵魚寺の末舎に居るとの事。今夜は幸ひ妙蓮を訪ひ。時宜に依らば一兩日も此處に忍びて樣子を窺ひ見んものとて之より路を東北に取りて妙蓮を艸深き庵室に尋ねしが。風さへ寒き冬の夜も早や二更の頃なりき

梵魚寺は慶尙道の大寺刹なり。瓦籃壯大にして數百の僧侶寺内に住居し。宛然佛門の一村落を爲すものゝ如し。妙蓮と云へる尼は既に五十路を餘れ

る老尼にして淑徳の聞へさへあり（常朝鮮の尼て其品行修まらざる者多く尼寺の口きゝて恰も男女野合の媒介所の如し）其庵すら汚はしき風聞とて更らに有りしとなし。此夜一面識ある英陽が事理ありげに悒然として入り來り是非にも一泊を望まれければ。今まで男子に宿など借したるともなけれど。斷り言はんも何んとのふ氣の毒なれば。已れは知己の庵に至りて英陽一人を此處に泊むるととなしけるぞ殊勝なれ

風も次第に吹き暴み雪さへ加はりし摸樣にて夜も更深けゝれは四方の戸締りなど爲し。英陽は佛壇の前に坐り。唯妹の身の上を案じ煩ひ。寢ね遣らぞありしに。既に其夜半頃若き女の聲にて。……賴み

ます〳〵。……嘘てホト〳〵入口の戸を打ち敲く音のなせしより。英陽は合點行かぬ事なり。風の音にも非らず。淫婦なとが情夫狂ひして門違ひせるものならんとて耳朶にだも懸けざりしに。……若し妙蓮さん〳〵。……と幾回も呼びつゝ戸板痛く敲けるより。這は門違にも非らず夜深けて何事ぞやと思ひ乍ら。も若しやと云ふの疑念は胸に一面ありければ蠟燭を片手に燈しつゝ徐ろに立ち出でゝ戸を押開くれは一人の婦人。緑髪も蓬ろに振亂し。衣さへ紅に染み跣足の儘にて降りしきる雪の中に立ち乍ら英陽を見て驚きつゝ後へに二足三足逡巡ひけるを。英陽は夫れと知りてか。……其方は香蘭で

はないか。……と問ふも四方を憚りし微けき聲なり婦人は我名を呼れて吃驚立止まり。熟々英陽の顔を透し見。……斯く仰せらるゝは見上では御坐らぬか、……とて早や飛び付ん計りに泣き掛りけるを。英陽は之を障へ乍ら。……此處は門外。今宵は主人の妙連も留守なり。疾く内に入りて緩々積る談話をも聽くべし。……とて香蘭を抱へ内に誘ひ戸さへ堅く締め。彼の佛壇の前に二人は差し向ひつゝ坐れど。香蘭は唯泣く計り暫し何等の言葉の出でざるも道理にこそ

第二十　骨肉情

香蘭は漸く涙を拭ひ。玄風の遭難より龍集の鐵柵

氏の爲めに一命を助けられし事より。雲門の虎口を遁れて惡漢の手に欺かれ東萊の傾城となりし迄の顚末を語りて。又も一聲嘆きの淚に咽べり。兄英陽は慰め乍ら玄風に於て母の橫死僕成忠に出會の事より。柳氏訪問の次第行衛搜索の爲め一年以前出途圖らず瘡傷に惱み此頃漸く東萊府に步り着きける迄の顚末を物語れるに。香蘭は驚き乍ら。……夫では母上は其場の御最後アヽ痛しや。去にても兄上の無難成忠の親切柳氏の來訪悲しひ中の慶賀。嬉ふ思ひます。と云ふ語を續ひて英陽は昨日東萊の門外に云々の貼紙あり名こそ變れど噂を聞けば必定妹の身上と思へば。一刻も猶豫ならず

で何れにか潛みけん梵魚寺こそは心掛り。幸ひ此處の妙蓮は此春以來フトした事より知人となりたれば今宵は此處にて樣子を探らんとて。一夜の宿を求めしに今戸を開けて吃驚仰天其姿は如何だ早まつた事してけり。女風情の其身が手出さすとも此兄があるのに。……と流石は兄の見識に香蘭は如何思ひけん。……兄上粗忽の罪は幾重にも御寬恕あれ。夫れでは旣に嚴しき此身の探索。到底遁れぬ生命斯くなるからは是非に及はぬ去らば。……と云ふより早く懷劍拔く手も見せぞ。我と我が咽喉を突かんとするを。英陽は狼狽ながら辛ふして之を押止め。……ソハ短慮なり死は易し生は難しとや

ら生きて此疑ひを免れんこそ今宵に限りし相談
にはあらぞや。我れも柳氏と共に内約の事あり。時
宜に依りては一命をも捨つる時節あらんに其方
を先だてなば我家の祀は誰人に任すべきぞ。幸ひ
斯ることもあるべしとて。別に用意せる一組の喪服
さへあり。之を被り喪中の男子に身を粉せば見咎
めらるゝ恐やあるべき。夜も早や曉方に近ければ
時遅れては仕損せん。早く〳〵と急き立てければ。
香蘭は實にもとて。其理に服し。涙ながらに刃を納
め聽て仕度を爲し。幸ひ壁に笠さへ懸り居たれば
（僧侶の笠を略ぼ喪中の笠の如し）之を眼深に打被り。血塗れたる傾城服
（多くは絹一組を以て製し其色は一樣ならず）は折よく床下に未た火の氣の殘り

あれば（朝鮮の家は石を積んで造り外面一方に口あり此處より火を焚き以て暖りを床上に與ふ）香蘭は手早く灰掻交ぜて之れに投込み後の疑を蔽ひつゝ。兄妹共に此家を立出てし頃は雪さへ最と積りて早や一番鷄の聲聞へぬ。

英陽は熟々思ひけるに。今より直に院塘なる安氏の方に行かんは易けれども。彼の幽谷なる傾城の我妹なる事世に知れたらんには。追人の來るは必定なり院塘は我れ一年餘も住ひたる處なれば。第一疑の掛るべきは此處なり。今暫く避遠の地に避けんに最早此頃は崔成建も柳氏の跡を追ひて報恩近傍に潜めるとならん。我れ計らずも約に背き期に後れ誠に謝するに言なし。去り乍ら瘢持つ足

弱の手纒ひありては所詮大事に與り難し。何れへか彼の身を潜ましめぞでは事面倒なりとて。行々思案に呉れしも相應しき處なければ。茲に英陽が父英駿の知己にて。報恩の俗難寺に僧侶となれる趙世外と呼はるゝ者あるに心附き。先づ之を頼りて妹香蘭の身を托せんとて。路を急ぎ。或時は輿或時は馬にさへ乘り夜を日に續て歩みしに。冬の日とて。山河旅行の困難は一方ならざりしも。幸ひ途中何等の障りもなく數日を經て漸く俗難村に着けるに。此頃は近き報恩に立籠れる東學黨は愈々再擧の摸樣ありとて。人心何となく騷々しき摸樣なるも。流石は有名の大寺刹なれは其境界全く

紅塵の外にあり。數多の僧侶は唯讀經念佛の外。左る騒動の有無さへ知らぬ實に難有き光景なりき俗難寺の老僧趙世外と云へるは。英駿と交り深き程ありて着實堅固の性質なるのみならぞ。聊か義氣さへありて當世に不平を懐くと雖ども。此國の制として僧侶は元來四民の最下列にありて彼の穢多と云へるに優劣さへなけれは素より其不平を訴ふる由もなく。只管是れ佛道の廢頽に歸由せるものなりとて常に嘆息をぞ爲しける。然るに今英陽が東萊の事などは打陰くしつゝ。聊か天下に望みあり同志と漢陽に會する約あるに。家に年若き妹を止めては。騒々しき世の中心にも掛れは漸

くは姿を變へさせ貴僧を賴りに暫らく御預け申さん爲めに參りたりと。眞實らしく陳べけるを聞きては義氣ある老僧の何條否む所あるべき。屑よく承諾を蒙りたれば英陽は大に喜び呉々も妹の身上を賴みて。軈て俗難寺を辭し去れり

第廿一 破獄雨

却說く柳南陽は折よく安氏に出會して。鄭朱明の妻子を托し。心置なき立別れ。再び大邱沙門に出でんは危險なり。寧ろ迂回してなりとも星州武陵に向はんものとて。路さへなき山中など歩りて二日目に漸く星州老谷に着きけるに。此頃は初冬の時節とて。各地より江流によりて新米を下し日本館

に澁るもの多きに地方官吏は執船と唱へ。其舟に出張りて過當の徵税を爲するもの多く。柳氏は兼々此事など耳にし惡き所業なりと思ひ居りし折柄。今此處に來れるに北岸なる永壁亭に大勢の人聚りて何事か騷がしげなるを見。傍への人に尋ぬるに執船より起りし喧嘩の由なれば。無用事とは思へども。聽捨てならぬぞ直ちに彼處に渉れるに。官吏どもは早や不法にも荷主などを縛りて引致せんとする摸樣なれば。柳氏は懲へ兼ねて突然其税吏及小使（邦人俗ユートンピと云ふ）らしき者を蹴倒せしに荷主も大に勢ひ付き縄引ちぎりて共に散々彼等を打懲らし。船は其間に纜を解かしめたれば。税吏共は痛手に

や堪へざりけん。茫然として之を追んともせず。又柳氏に打掛らんとする勢もなく泣寢入りし有樣なれは心地よげに立去らんとする所へ。大邱監營の捕吏兩名來會せ。此有樣を見るより直ちに柳氏に向て。……此奴彼の人殺に相違はあるまい。……とて右と左に打込まるゝを。柳氏は苦もなく受流し居る折しも以前の税吏は同僚なぞ語ひ來り。果ては一拾餘人の合手となりければ。柳氏も今は是迄と一刀拔ひて切結び。三四人にまで負傷せしめしも。多勢に無勢敵對ふべくもあらぞ。遂に嚴しく縛めら
れ大邱監營に引かれしぞ。憐れなれ
柳氏は不慮の災難に罹りて身は鐵窓の下に繫が

れ。足枷までも箝められ乍ら獨り思案する樣誠に無謀の擧動なしけり前途多望の身をも顧みぞ此儘此處にて處刑を受けんか。死罪は當然なり好し夫迄には日本人たることを打明し兩國交渉の上には我公明なる裁判受けんも。折角の大望を空ふし同志に對し何の申譯があるべき。幸ひ肌身に離さゞる多分の金塊（朝鮮各道金塊多し）さへあれは厚く獄吏に賄ひ。脫獄の手段を計らんとて思案の折柄獄吏來り明日は吟味なり辛き目見せんと恐嚇ける這は此國の習慣にて賄賂を求むる手段なりと知れは。柳氏は竊かに之を手招き多くの金塊を與へしに。獄吏は意外に驚きて打て變つて親切顏。其夕刻頃這

は秘密なりとて足桎まで外し呉れ。柳氏が豫て所持したる短劍までも與へ呉れければ。必定我れに破獄を諭るものならんとて。厚く禮など陳べ。借て夜に入り雨風さへ強く物凄き天氣ともなりたれば。時分は善しとて聽て彼の刀を以て屋根板を破り難なく屋上に出でけるに。人の認めし摸樣もなく。幸ひ後面に小高き丘隴あれば。直ちに此處に飛び越へて監營の廓外に逃出で。風雨を衝ひて一散に星州さして走りけり

第廿二　苦肉策

柳氏は辛ふして監營の獄舍を逃れ暗路を歩り星州武陵村に出でし頃は東天既に白く。此處には官

の米倉などあり平日なれば取調ぶべきとも有るべけれど疵持つ足の心細さ。此處より轎輿に乘りし心急して走りける程に。六日を經て報恩縣に着きたれば。先づ此邊り迄來たらんには追人の憂もあるまじとて。聽て東學黨の動靜を探りしに。黨勢大に振ひ再學の計畫十分なれば。柳氏は事の意外に盛んなるに驚き大に考ふる所あり。之より一日も早く目的す地に赴かんとて。路を急ぎつゝ拾餘日を經て漸く漢陽に着し。直ちに廓内に入り或旅店に潜みぬ

漢陽は王城にして李氏開國五百餘年天下を治むる處。王宮官衙城廓の構造壯嚴にして各國公使館

等もあり。同胞の日本人亦少なからねど。柳氏は始終韓人の姿を變せぞ。又是等に交際も結ばぞ唯廷臣等の擧動如何に注目し、且は既往の事なぞ探れるに、清國の星使たる袁正崖氏は久しく茲に地盤を固め。此國を視ると附庸の如く。廷臣を輕んぞると屬吏の如く。其威權は强く中外に行はれて飛ぶ鳥も落つべき勢あり。彼の尹族の如き其政を施すや。常に之れが鼻息を窺ひ汲々として及はざるを憂ふるの有様にて。曩きに日本と防穀事件の談判あるや。廷臣等は自己の處見を抛ち去り。先づ袁星使の意向を叩き。清國の援軍を得るを約し。断然日本公使の要求を拒絶せんとせしも。中道にして袁

氏が表裏反覆之を否みしより。廷臣大に狼狽して爲す所を知らず。終に其要求に應じたるが如き言ふべからざる失体を來す事あり。袁星樣の干渉政略は實に朝鮮の進路を妨ぐると少なからず。又尹族の專橫なる國王殿下の賢明なるも尚は王妃尹族の掣肘を蒙らざるを得ず。故に露國公使の如きは頻りに王妃の歡心を求めんとし。世に之を王妃政略とも稱せらるゝ程にて。這は全く尹族の然らしむる所。而して廟堂の樞機に參與すべき大臣は概ね尹族に非らざれは。之れに因緣ある門閥者に非らざるはなく。是等の要路者は國家的の觀念を有して其國の大計に苦慮するものとて一人もなく。

私利私局のみ多く。既に彼の仁川月尾島に新設したる典圜局事業の如き。日本の大三輪氏を聘して會辨とかし其事の緒に就くを得たるに。廷臣等に昵近なる安炳壽の佞言を納れ。功勞ある大三輪氏を斥け日本國との交際上幾分か感情を害せしなど實に其非政名狀すべからざる者あれば。柳氏は愈々此國革新の必要を知り。取敢へず思ふ所を記し速かに彼の東學黨を煽動し之をして革命の事業を爲さしめんとて。崔成建氏に一書を飛はせり頃日東學黨再燃の風聞頻りにして。各地よりの注進は櫛の齒を曳く如く。報恩は其本據にして黨勢甚だ盛んなる擬樣のみか。近來崔成建と云へる軍

師を得て參謀となし。其目的は單に外人排斥のみに非らず。當路の大臣を一掃して新政府を立つるにあり。今にも再擧して漢陽に打入らんとの事聞へければ。柳氏は借てこそ崔氏も既に之れに加はりたるかと。心窃かに歡びつゝ猶他の地方の注進はを漏れ聞くに。威鏡道の德源にても四五千の黨員近傍を遊說し。浩源北靑地方に迄進入して一種の手形を製し。之を豪商富農に與へて曰く。事成るの後正に通貨と交換すべし。宜しく糧餉馬匹を送りて我黨の軍用を辨ずべしと其辭令甚だ嚴酷なれは人皆後難を恐れて唯命是從ふ有樣なり。又三四百の黨人は露人さへも加はりて。露境なる豆們江

近傍より押寄せ來れりと。全羅道よりは金溝縣院坪村に數千の黨員集合し。又羅州にては一層强盛なる團結あり。此頃日本より逃れ來りし韓人ありて其牛耳を執り居れるに如何にも金氏の同類らしく。或說には珍島に流竄せられし鄭朱明なりと云ふものありとの事に。柳氏は愈々感ぜる所あり。最早[illegible]からむ一大噴火山の破裂を見るとならん[illegible]よりは廟堂諸公がこれに對する擧動を窺ひ。又清國公使の動靜までも窃かに探知し臨機應變の策を畫せんものとて。只管心を勞しぬ

爰に漢陽の或僻陬に微かなる寺院あり。此寺の僧侶に李法明と云へるは。聊かの因緣によりて柳氏

と懇意になりしけり。柳氏は此國の習慣にて王妃などに仕へる官女は。多く情夫を僧侶中に求め時々寺詣りを名として之れに密會ふ由を聞き居ければ。王妃任せの政治を施せる此國の秘密は官女の手を借りて探知するより外に良案なしとて。幸ひ彼の李氏とは入魂の事なり。且は内々李氏も官女に縁故ある由を聞きければ。夫となく寺院を訪ひて厚く土産など贈り、直さに東學黨の擧動に對する要路者の意向。政府の方針など探らしめしに。大に事實を得るとあり。同時に清國公使館の書記生に交際の縁故を求め。之れに贈賄して彼國李中堂の意見及び公使の決心等を探らしめしに。是亦確

かゝる報道を得。就中朝廷には先頃より露國と何か交渉の問題起り困難し居ける摸様なりしに。此頃愈々切迫に及び。袁星使は此機に乘じて大に廷臣を煽動して蚌鷸の爭を爲さしめ。自ら漁夫の利を占めんとしつゝ。實に内憂引患交々なる際なるを探知し。時節到來最早一日も空ふすべからざるぞと窃かに人を報恩なる崔成建が許に遣したり

第廿三　東學黨

曩に崔成建は柳氏の書簡に接して大に感動する所あり。急ぎ仕度を整へ報恩さして出發し。日を經て縣下に着し東學黨にぞ加はりけり。此報恩縣と云へるは忠淸道にありて慶尙の尙州に近く人烟

稠密商估稍繁昌の地なり此所三四丁を距りて接低村と云へるあり。其東北野に三年城と稱する一の城趾あり。石壁堅牢頗る要害を極む。二三年來漢陽を拂はれたる東學黨は來りて此處に營據し遠近に遊說して大に同志を募り。金穀を集めて再擧の謀を議し黨勢漸次振作の模樣あり。既に鎭撫使魚仲允が聖詔を傳へて解散を諭せしも更らに其効なきのみか。近來は啻に外人排斥を以て目的となすのみならず。當時の政治に反對し。彼の尹族が外戚の權を弄び朝廷の樞機を握りて私局多きを惡み。第一着の運動としては先づ尹族を斥けんとするに在りて既に「天誅尹族各大臣」などゝ大書せ

る大旗を押樹て。三拾名を以て一組となし。組毎に一小旆を分ち。今日は壹萬明日は拾萬とて聚散出没常なく、而して黨祖と同姓なる崔氏（成建非す）を尊んで崔法憲と稱し。黄河一。金來鉉朴升浩など云へる者。其領袖となり。竹槍弓箭火機等を集めて黨勢愈々張り。其本據たる三年城の如きは旌旗飜々として武装せる黨員は四門を堅め。今にも開戰を期せる光景然るに朴英陽は俗離寺を出で、一先院塘に歸らんとせしも。豫て約せる一大事の心に懸れるのみか同志の動静も如何にや。潜かに報恩の摸様を探らはやとて例の大笠を最と眼深に穿ちて。其縣下に至れるに斯く打騒げる模様なれは。最早

時機到來せり由斷すべからぞ。意へらく柳氏は向は漢陽にあらんが。崖氏は我を待詫び既に黨中に加はりたらん。出來べくんば面會を求め我が進退も決せんに都合善からんとて。三年城の近傍を彷徨ひけるに。黨員と覺しき三人の壯漢は馳せ來りつゝ大聲揚げ。……曲者待て縛り上げよ。間諜奴懲もせぞに。……と口々に呼はり。早や英陽に繩打掛けんとするを無禮者奴と思ひ乍ら。英陽は故意と抵抗もせぞ。彼が爲す儘に任せたれば。三人の男は手柄顔にて。聽て城内に引き糺問所とも覺しき處に据へられたり這は英陽が計謀しとにして。城中の動靜を窺ひ且は必定成建のあるを知れば。之れに會

はん手段とこそ知らる
武装せる數名の纂員は出來りて。其一人長者とも云はるべき男。英陽を睨み乍ら。……其方は漢陽の間諜にては無きや旌者を詐れ。……と叱り付くれども英陽は驚きもせず平氣体にて。……拙者を間諜とは大ひなる思違ひ。拙者は院塘の者にて朴英陽と申すもの。俗離寺に所用ありて參り此近傍見物仕り居りしに思ひ掛けもなき災難疾く御放ち下されたし。……と云ふを打聞て數名の者ども。悪き奴空言吐くなとて。手に〱捕棒取りて今にも亂打すへんとしける處へ。後面の[illegible][illegible]け上げ優々として出で來れる者あるを見て一同は顔見合せつ躊躇け

るを。彼は尻目にジット睨み粗暴なる事爲すまトと
て一同を叱り付。早や英陽が側に來り其束縛を釋
き了りて。時に朴君如何でした。……と云はれて英陽
は頭を上げ驚きながら。……ア、崔氏にてありしか。
多分は此處と鑑定を付たればこそ網目にも罹り
て參りたれ。好き場處にて會ひけり……イザ物語ら
んとて起上れは成建は莞爾と打笑ひ。……ドウモ待
艸びれたネーと云ひつゝ奧へと伴ひければ。件の
黨員どもアッケに取られて暫し途方に暮れ居た
るも笑止し

第廿四　視察途

英陽は成建に伴はれて奧の廣間に通りければ。此

處は軍略兵法なぞ謀議する所と見へ。地圖なぞ擴げ散したる傍らには孫子なぞの兵書も見ゆ。窓の下なる小暗き處には弓箭火機鎗刀なども幾何となく立て連ねたり。成建は先づ英陽に再會の挨拶を了り香蘭搜索の顛末なぞ尋ね。英陽よりは今日迄の成行を語りて。意外にも手間取りたる事を詫しけるに。成建は香蘭復讐の事實など聞く每に屢々感賞の聲を漏しつゝ。偖て自身が柳氏の手備に接して俄然に旅立したるより。柳氏が途中に於て鄭朱明の妻子を助け。妻子は今に安氏の扼介となり居る事など詳しく物語り。了つて成建が入黨以來今日の境過を吐露しける樣。……拙者は兼々申

上たる如く斷然此黨に加はり之を楷梯とし。御約束の目的相達するを捷徑と存ド居れる折柄。柳氏の書信を見るに最も同感の趣きなれば。時節も追々切迫の場合とは云ひ。旁々貴下の御歸村を待つの暇なく取急ぎ當方に相向ひしに途中にて同鄕の黄承彦と云へるに邂逅し。同人の身上を聽しに既に黨中に加はり。一組の長に擧げられ居る由なれば。屈竟の紹介人なりと存ド。直に同行して此處に參り。宣誓の上黨員に加はりしに。承彦より拙者の事を仰山らしく吹聽やしけん。翌日思掛なく參謀の重任を托せられしより。幾回か辭退致せしも許容されず。見られる通り此室にて今回の軍略謀

議を凝し居れり。柳氏も數日前通信ありたるに。今は廟堂の動靜探索にも好手段を得たりとの事なれば。遠からぬ吉報に接するならん。貴下安氏の許に御心懸りもあるべけれど。彼は忠實なる者なれば鄭氏妻子の爲めにはヨモ粗略には致すまじ令妹の行衛相分り且は一條に付彼の寺へさへ御忍はせ相成りし上は別に懸念も要すまじ。折を見て陸塘へは云々の便すべし。幸ひ貴下は此處に止まり玉へ拙者惡くは計ふまじ。……との親切なる敎へに英陽は素より望む所然る可く御執計ありたし。……と應へけるに依り。成達は直ちに彼の領袖ども物語る所あり。軈て英陽を擢て成達の補佐たら

じめ。其後全羅道黨勢視察員として密行せしむるをこなり。英陽は大に喜んで行李を裝ひ成歡に後の事なども頼みて其年の臘月空最と寒き日三年城を出行けり

英陽は喪服の儘微行して全羅道に入り。其金溝縣の院坪村こそ東學黨の巣窟なれば。先づ此處に至りて動靜を探るに。報恩の如き勢なしと雖ども何れも遠らず漢陽に押出さんとする模樣ありて。羅州に立籠れる同黨と其進退を一にする約ある由を聞くのみならず。羅州の同黨は昨今或名士を得て首謀となし。黨勢大に振へるを傳聞し。英陽は程經て之れに向へり。元來羅州は東南平縣に接し南

は靈岩郡に界し。西は洋々たる大海に面し。西北は咸悦務安の二縣に連り。東南に月出山鋸齒の如く雲間に峙ち。東北に鳳凰山峨々として聳へ。其南に望臣山横はり。其西に錦城山巍然たり州廳は錦城の南麓にあり弘く高壁を繞らし。茲に東門を設け市街其中に在り。南面して官衙を築き前門望華樓の扁額を掲く。市區の構造他の地方に其比を見ざる所。榮陽は其壯宏に驚き乍ら北錦城山と望臣山の中央を行進して一峴に出でしに。極めて難路なれは徐々歩を移し。龍頭山に到れるに此頃は早や春色さへ催して來て此處の林間に數多の人聚り。酒を置き。胡茄を吹き。銅鈸を鳴らし。大鼓など擊ちて。

最と興せるを見。英陽は不審みつゝ行過きんとせしに此方の巖上に頭に戰笠を戴き身に萌綠色の道袍を着し。極めて異樣の姿を爲したる隱士風の男腰に瓢懸け乍ら大聲詩を吟して曰く（左の詩實際東學黨員の手に成る）

山見水弟與同遊　早則仁春晩義秋
月偏千峯雲梯洛　風鐘四海雨篩舟
將乘騏驎還親島　欲釣螭龍伴故鷗
肅立中央看宇宙　六朝空處太平樓

吟聲太た妙なりければ。英陽は立止りて耳を傾けるに。彼人突然走り來りて。貴下は朴英陽君に非らぞや。……と英陽怪み乍ら熟々其人を視れば疑もなく珍島の恩師鄭朱明なりとは亦意外なり

鄭朱明は四方を視廻はし英陽に談れる樣。……實は拙者は脫走の身の上貴下に別れし後其翌春の事とか。所安島より廻し日本漁船（此近海日本漁艇多く實ニ二千艘と稱す）が其本國に歸る由を聞き。幸ひ其水夫の某とは舊知の人なれば。竊かに事情を告げしに快よく承諾せられ。其夜暗に乘して碇を拔き帆を揚けしめ。日ならす日本對州に着し。夫より輪船の便を求めて遂に其國の都東京に迄赴き。或る旅亭に金氏を訪ひて。過越方の物語りに二人共に憂國の淚を絞り。又將來の計畫など計議て尙は日本國勢の一斑をも窺ひ大に感覺する所あり。程經て歸國の途に就くに臨み氏と確く再會の期を約し。其國馬關と云へる

より再び便を漁船に借り、本州の沿海に着し。姓名を變して徐應賢と稱し、近傍不平の徒を嘯集し、東學黨の一派を起せしに意外にも應援の徒多く、今や總勢五千と號す。金溝縣院坪に聚るもの皆氣脈を茲に通し一擧して起らんとするに及ひ今日は初春の山色を賞し勇を鼓し氣を養はんとて黨員此處に集り興せるなり、夫にても貴下珍島出發の後は如何爲れしか。又此處へは何用ありて參られしや不審き事ともなり。……と云ふを打消し英陽は玄鳳にて母の横死より。妹の身上及び友人柳氏が鄭氏妻子の危難を救ひ。目下其妻子は安氏の許にある事情など漏なく物語り了て。……今回の行は

拙者も同じく東學の一味徒黨にして報恩に據るものなれば。黨勢視察の上氣脉相通じ機を見て變に應せんとを約せんが爲めなり。御怪みは御無用なり。……と云へは鄭氏の徐應賢は且驚き且喜び深く我妻子の奇遇なると感じ。厚く遠路來訪の勞を謝し。聽て黨員に紹介せんとて彼の林間に誘ひ行く。斯くて朴氏は確く同盟の約を壟へ日を經て報恩に歸り。直さに視察の顚末を報道しければ成效は勿論一同大に喜びあへり。後威鏡道に趣きたる視察員も好結果を得て歸りたれば。愈々再擧の準備に餘念なかりける

第廿五　窮鳥思

偖も朴氏の忠僕たりし安成忠は鄭朱明の妻子を預り。苟且にも粗略なる扱ひなど爲すとなく恰も己れが主人に仕ふるが如く最と鄭重に盡しけるを。妻子は却て心苦しく思ひて。種々家事の助などなし居りしに。彼の東萊よりの探索は極めて嚴重にして。或時は三人の巡吏まで入り來りて。鄭氏の白連を視て其年齡の相似たると容皃の美麗なるとより。必定香蘭の幽谷ならんとて既に之を縛りて引立て行かんとし。白連は勿論母の驚き大方ならず。安氏夫婦も共に百方辨解しけるも彼等一向承知せざる摸樣なれば安氏は是非なく貯蓄の金さへ賄ひて漸く冤罪を免れしめたるも。其後何と

なく薄氣味惡く。鄭氏の妻子は固より安氏夫婦迄も安き心なかりける。且朴英陽は家を出でゝ既に二ヶ年に近けれども更に音沙汰なければ。如何になりしけんと。是れも亦氣懸りの種となり。安氏夫婦等は頻りに憂き思を爲し居りしに或日の事とか報恩よりとて飛脚体の男一通の信書を屆けゝるを見れば疑もなく英陽の手跡にして。妹香蘭に再會せし顚末より自身今日の境遇まで詳細に書認め。且鄭氏家族の儀は。目下騷々しき世の中故。珍島の方へ行かるゝ事は幾重にも御止め下さるべしとあるを見。安氏は先づ死したりと思ひし主人兄妹の消息を得たるを喜べり

然るに安氏思ひけるに。鄭氏妻子は珍島郡に送らんとは我れも不安心なれど。之を此儘に止め置からんも最と本意なし。今報恩は東學黨の本據として騒がしき有様なるも。朴氏及び崔氏迄もあるとなれば。万一の日と雖ども差して恐るべきとはなかるまじ。且香蘭の潜める俗離寺と云へるは報恩の縣下とは稍道程もあるとなれり。殊には寺院の別天地。斯る變亂に際して危ふき處にもあらざるべく。幸ひ我れも朴氏の家僕たりし頃該寺の僧侶趙氏とは面識あり。今より彼の妻子を伴ひて彼地に到り。香蘭にも久振りの面會を遂げ事情を語りて頼みなば都合よき事やあらん。左すれば我れも妻

も心安く枕を高く眠らるべしと。兎角に思案を定め。先づ鄭朱明の妻子にも此事情を語らひけるに。娘白蓮は健氣なる性質なれば頗る之を贊言し。母も共に然るべしとて愈々彼地に趣くととなり。安氏も大に喜び妻にも事の理由を告げて留守を頼み。彼の妻子には轎輿を雇ひ已れは之れに扈從して徒歩の仕度を爲し。院塘村を見捨ける安氏が心の中ぞ切なけれ

茲は忠清慶尚兩道の境界士基幕村北に、九峯山東に飯峯東南に木山を以て畫せられし一小村に。昨夜來、全羅道より來れる大勢の東學黨は竹槍銃劍弓箭の如き武器を携へ。大小數流の旗さへ飜へし威

勢頗る堂々たり。今朝は直ちに報恩の三年城に押込み、黨勢を合して漢陽に打入るべき約束ある由にて、最早報恩へは路程も遠からずとて夜來休泊せるものなり。然るに此方の樹下に最と嚴しき異風の体を為したる首領らしき人は。數名の輩下を左右前後に侍せしめ。自ら縄床に腰打掛け乍ら四方キヨロ〳〵見廻はせる折。彼方より旅人と見へて四十近き婦人の妙齢の娘さへ伴れ從者と覺しき老人と共に歩み來るものあり。彼の男は何故か不審そうに旅人の顔打眺め。軈て輩下に指揮して恐るゝ彼等を已れが前に引かしめたり

第廿六　奇遇涙

鄭朱明の徐應賢は。今しも羅州及び金溝の東學黨を率ひて報恩に赴かんとするの途中。士基幕村にて勢揃への爲め休息中。計らずも我妻子に似たる旅人の一行に出會ひたれば。輩下に密語きて此方に引せけるに。案の如く鄭氏が豫て忍ばせ置きたる妻及娘白蓮にてあり且其從者は朴氏の忠僕なりと聞き居りし安氏なれば驚くと一方ならず。別けて妻子は夢かと計りに思ひて先立つものは唯涙のみ。鄭朱明は怪み乍ら安氏に向ひて。……先頃朴英陽より承れば。妻子は思ひも依らざる御厄介申譯も無き次第なり然るに此度の旅行こそ時節柄と云ひ心得難し。何れを當てに御伴ひ下さる事に

や。……と問へば安氏は。……去ればなり蒸くろしき茅屋にて不足ひなる御世話仕りしも彼の香蘭が復讎の一條より兎角に東萊よりの探索嚴しく御令孃と香蘭とは年齢も同じ事なれば疑ひの基となり既に危ふき場合も辛ふして漸く免れし事さへあり右様の事屢々之れ有りては御預り申す下郎も誠に心配に堪へ申さず。幸ひ俗離寺に知己あり且香蘭も潜み居る趣にて。此處は東萊と程遠き處なれば嫌疑の恐れも少なかるべき事と存じて。俄かに思立ち御伴仕る處にこそ。……と應へければ鄭氏は其親切を喜んで厚く禮など陳べける中。妻子は漸く頭を上げ涙ながらに過越方の物語などな

し。……
妻　さて御身の姿は何事にて侍べるや。今は何れに趣かせ玉ふや
白蓮　又しても危ふき御企て事遊され玉ふには非らずや、偖ても嘆はしや。……と妻子は泣々掻口説くを。鄭氏は道理と思ひ乍ら故意と聲荒らげて叱り散らし。……我計畫は婦女子などの知るべきとに非らず夫故嚢きには早く注意なして其身を忍はせ置きたる次第。今とても同様。此身は如何になるべきか生死の程も知べからねば。安成忠の親切に任せ俗離寺とやらに身を潛ませ。我事成を聞かは世に出て尋ね來へし。夫迄は夫婦父子の緣は無きものなりと思ふべかし。我は今にも出立して報恩に趣き。崔成建朴英陽など丶諸共に

黨勢を揃へて漢陽に打入らん。疾く此處を立去るべし。……と泣入る妻子を叱りたて。安氏には懇ろに依賴て彼方にこそ旅立たしめし。鄭氏の心腸こそ實に寸斷の思しつれ

鄭氏妻子は再會の喜び間もなく別離の涕を絞り。最と本意なくも此處を立出で。安氏が慰さむる親切に氣を取直して。其夕刻頃俗離寺に着きける。聽て安氏は僧の趙氏に面會を遂げて來訪の理由を語り。只管二人の事を賴みしに。趙氏は最と輕々しく承諾ひ三人を奥の一間に請じて香蘭を呼び面會爲さしめたり。香蘭は久しく振りに安氏に會ひ稚な心に其顔兒なぞ覺へあれば痛く悅び。是迄の親

切を謝し。且我身の上及び兄英陽が事など打語り。又鄭氏の妻子には珍島にて主人に一方ならぬ厄介を蒙りたる次第など語れば。白連は大郎途中の遭難及び其節柳氏か斬殺したる二人の賊は香蘭を拐かせしもの、由を語り。次て今朝途中にて図らずも父に出會たる顛末等を述べ悲しみの中に喜色を浮べて四人共々積る談話に時を移し。日も既に暮れて安氏も此夜は茲に泊り翌日早く暇をして歸りける。之より香蘭と白連は姉妹の如く親密なる交を結びしに。彼の東學黨は愈々各道に起りて報恩に聚り昨朝既に漢陽を差て上りたる黨勢は拾萬人と稱し。其風聞高く聞へければ香蘭

は兄英陽及柳氏などの身の上を案じ。白連は母と共に頻りに父の事のみ思ひ煩ひ何れも安き心はせざりけり

第廿七　烽燧火

此春以來京畿道東學黨の領袖たる。徐丙鶴も亦鎭川に據りて黨勢を張り。報恩と相應ぜんとするの色あり韓廷の恐惶は一方ならず俄かに全國三百六拾ケ所の烽燧（各地要害の山頂に烽燧の台を設け兵員を附し危急を報ず其の要に供す）及び間烽二百六拾五ケ所へ二千餘名の烽燧兵を增發し。又清國公使に野戰砲十五門小銃一千挺及びこれに對する彈藥等の購求を依賴し。同國軍艦操江號は旣に之を運搬し來りたる由にて豪邁の名高き徐

丙勳は江華の兵を率ひ洪在義は太衛の兵を從へ。將に追討の途に上らんとする摸樣あり。彼の尹族等の恐懼は實に甚しく。其戒嚴頻りにして萬一の日には速かに何れにか遁去らんとて其準備既に成れりと云ひ。濟物浦頭には日本軍艦八重山高雄愛宕。淸國軍艦經遠濟遠操江の諸艦を初め英米露の戰艦までも來りて警戒嚴重なりとて。漢陽は勿論仁川の如きも上下人心洶々として今にも一大戰爭の起らんぞ勢ひに迫れり

柳南陽は心竊かに思ひける樣。最早數日を出でざる中。各道の黨員は必らずや旗鼓堂々一時に漢陽の四境を圍むならん。韓廷の軍備如何に整ふとは

云へ。人心既に裏反して收拾すべからざ。縱令清國公使が陽に聲援を與へ陰に自ら謀るも衆寡固より敵す可きにも非らざ。尹族亡滅の機は既に熟せり。況んや今老ひたりと雖ども。尙は钁鑠として用ゐるに足るミき大院君の外に在るあり機に乘ト變に應トて如何なる畫策を爲すも亦知る可からざ。此時に當り最も望を革命の後援に屬せらるべき者は日本公使其人にあり。今の公使大山健三氏は有爲快活の士なり。聞說此際に處して大に決する所あれりと。萬一にも再び先年金氏の亂の如き失敗を買ふあらば。實に日本は何の面目を以て東洋の天地に立つべけんや。宜しく今日に在りて竊かに公

使に說くに大計を以てせざる可からずと。柳氏は頃日來夜に乘じて密に公使館に出入し交を大山公使に結び。直さに意見のある所を以てせしに。公使も柳氏が多日の辛酸を憐み。且其志に感じ大いに贊成を表せられ。斷然此際に處して日本帝國の國光を發揚して韓國の一大革新を爲さしむる事に協議纏りければ。柳氏は矢張り韓人の資格を以て双方の間に畫策することゝなり。之より又大院君などにも交際を求めて窃かに他日の計畫を講ぜり

然るに漢陽に於ては晝夜兵馬の奔走繁く。今にも騷亂起らんとて老幼相扶けて難を避けんとする者あり。最と物騷がしき摸樣なり。日本人の如きは

一の團体を設け義勇兵の資格を以て公使館を保護するなど其騷きも一方ならず。然るに果して一夜各所の山上には天を焦すが如く烽燧大に揚りけれは。スワ東學黨起れり。今にも大勢四境に押入り來らんとて上下の恐惶名狀すべからず。彼の徐丙勳洪在義の如きは早くも追討の兵を引率して報恩さして打出でける。去れど此度の暴動は獨り清道報恩のみに非らず、咸鏡。全羅。慶尚は勿論。京畿道の同黨までも機を示して一擧に起りたるなれは。此追討軍は恰ら螳螂の牙城に向ふと一般。素より。何等の効もなく。大軍は早や既に四境を壓するに及べり

第廿八　善隣の誼

漢江の沿岸にては砲聲天地を轟かす計り既に開戰の摸樣なりしが。程經て數多の官兵は散々に打破られけん。血にさへ塗れ乍ら東大門内に逃げ入る者引も斷れず。早や東學黨の旌旗は廓壁近く押寄せ來りて。將さに漢陽の城内に入らんとする恐ろしき威勢なり。官兵は漸く廓門を守りて時々小銃石抛などにて防戰を爲すに過ぎず。實にも孤城落日の光景なり

然るに韓廷にては恰も鼎の沸くが如く。殊に尹族の恐惶狼狽は大方ならず。中には難を何れにか避けたる者さへあり。唯領議政尹應直。左議政尹永春。

右議政趙世欲。戸曹判書朴内楊數人を止むるのみ各國公使も大概仁川に遁れ。唯清國公使袁正崖氏。は身を免るゝの暇なくして王宮に來り。日本公使大山健三氏は彼の柳南陽其實日本人渡邊鐵臣を伴ひ居留人數十名に擁護せられて王宮に至り國王殿下に謁見せしに聰明なる殿下の事なれば。斯る危急の時に際しても少しも周章の態なく。靜かに策を問はれけるにより。大山公使は外臣の身其任に非らずとて再三固辭せしも。更らに御許しなければ謹で意見のある所を陳述しける樣。……恭しく惟みるに非常の時に處するには非常の策を施さゞるを得ず。外臣熟々平生の政弊を察するに罪

は一に尹族にあり。尹族は畏くも王妃殿下の一族とし。多年外戚の權を弄びて私利私局擧て數ふ可からざ。朝廷の大臣は多く尹族に出て。偶々否らざる者と雖ども皆緣を同族に有する者。國民の朝廷を怨府視する者は是れ尹族を怨むなり。外交の事の如き常に失敗のみ多き所以の者は。尹族が私に基くもの。今の東學黨の如き其名とする所は外人排斥にありと云ふも。其實は尹族排斥なり故に今日の策唯永く尹族を遠ざけ。更らに弘く人才を登用し政弊の改善を確約するに在り。然らざれば啻に暴動の鎭定すべからざるのみならず。殿下の玉體を置かせらるゝの地なきに至るべし。速に叡慮

を決せらるべし。……と滔々として述べけるを殿下は熟々御耳を傾けられ。忽ち側なる尹應直を睨み付け。汝等一族實に予を過たしめたり。疾く退ひて罪を待てとて廷臣一同を退かしめ。更らに大山公使に向つて。……卿の策極めて予が心に符合り。速に其計を爲さん衝に當り事を執るの人やある。……と詔はるれば。公使は其人正さにあり神慮を休めらるべしとて。柳氏を伴ひて其坐を下れば清國公使は如何に思ひけん。苦々しき顔色して自ら是も亦一間を差して退けり

少焉ありて日頃國王殿下とは疎濶なる大院君には。日本公使大山氏及び二人の洋裝紳士を伴ひ詣

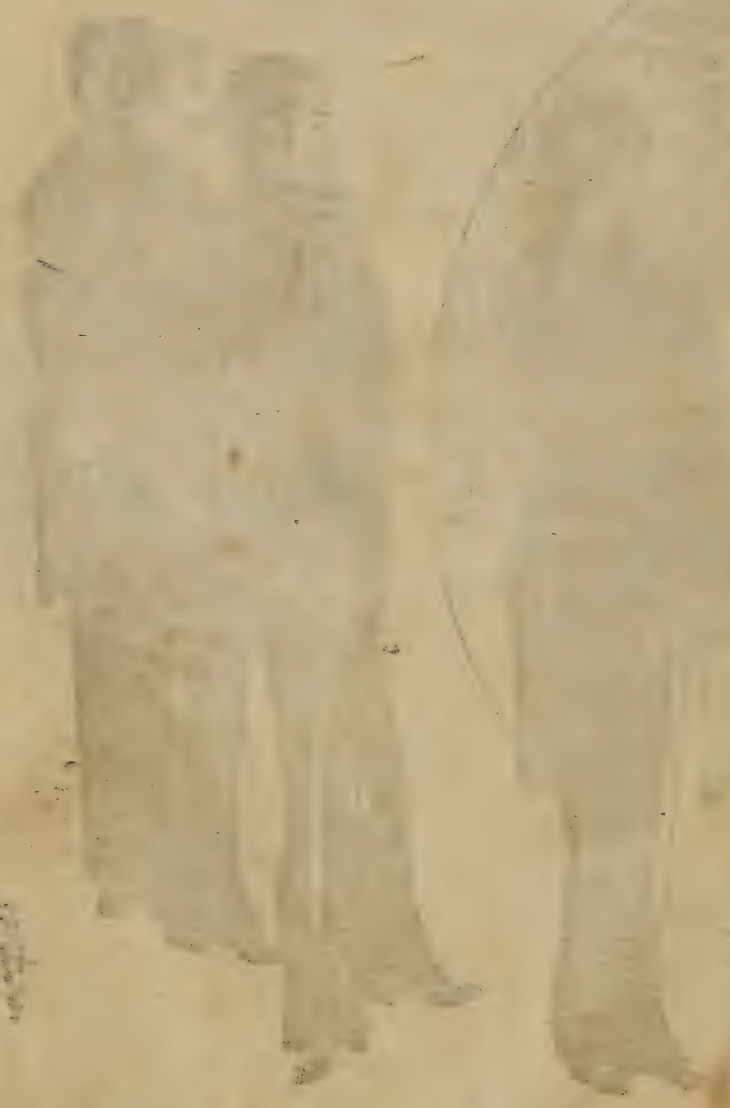
ら參内あり。國王殿下と對面あらせらる。此二人の縉士は恭しく闕下に拜し。……臣等先年國の爲めに義を唱へ。大闕を騷し殿下の宸襟を惱し奉り。其罪實に萬死に當る。然れども是れ臣等殿下に對する微衷の致す所。殿下今にして顧み給はゞ當年の事敢へて無謀の擧に非らざるべし。爾來臣等日本に流浪し常に故國を夢みざるなし。唯時到らざ機熟せざ今日に及べり。茲に同志名を東學黨に假り。再び義を唱ふるの報に會し慨然潛行昨濟物浦に着すれば。漢陽既に變あるを聞き。急に漢江を上り辛ふして廓内に入り日本公使を訪ふ。公使大に喜び先づ慶大院君殿下に往復せられ。議熟し約成り、今

や妄りに龍顔を拜す。臣等萬死誓て前罪を償はん……と奏上しけるを國王殿下熟々聞召され。……ア、汝は金浩權朴英高なるか。先年の事は予が不才の致す所。今や四境既に敵の爲めに圍まれ。安危且夕に迫る。民怨の集る處尹族の罪大なり。予之れが處分を爲す汝等彼れに代り予を扶けて平定を計り民衆を安んぜしめよ。……と最と難有き恩命に。金氏等は宛も夢の如く感泣して恩を謝し奉りければ。大院君殿下よりも。……斯く相成る柄は曩日の如く親密の交誼を復し時々國政上協議に與るべしと……陳述あらせられ日本公使よりも御悦申上げ。一同萬歳を歡呼しける。何時の間にやら清國公使も

其席に臨まれ居たれど。唯茫然として何事も言ふ由なし

第廿九　萬歳の聲

東學黨の大軍は既に東南の兩大門を破りて。其勢ひ恰も洪潦の堤防を決するが如く。宮闕近く馳せ來り。口々に。……尹族を屠れ。……尹族を斃せ。……引出せ。……と叫びつゝ、一派の軍勢は既に彼等の邸宅に亂入して火の手さへ揚れり。斯る折柄彼方の小丘に登りて勢強く押來る大軍を障へて。聲高らかに諭諭すものあり。雷の如き嘲罵の聲を意とせず。雨の如き矢石の中に立ちて曰く。……國王殿下は黨員諸君の希望を納れらる可し。廟堂は既に一變革せ

族は悉く斥けたり。諸君が切望止まざりし改革は行はれり。我れ今諸君に好知己好先輩取も直さず新政の首領を紹介せんと云へるは疑もなく彼の柳南陽なれば。報恩黨の崔成建朴英陽は勿論。全羅黨の鄭朱明の徐應賢などは夫と知るより馬首を向け來りて。今や波瀾を打たせつゝある大軍に對て。……斯く云はるゝ柄は。諸君暫く鎭靜られたし。ヨモ言を食む事あるまじ。我等諸君に代り宮闕に趣き。事を探り實を報せんと……て柳南陽を先立馬より下りて彼方に向はんとす。時に恰も好し日本公使大山氏は金朴二氏を伴ひ來れは柳氏指し示し云ふ……此二君こそ余が諸君に紹介せんと、欲する

新政の首領なれ。……と言未だ了らざるに。鄭朱明は目早く二人を見て……コハ珍らしや何時歸國せられたりや。二君既に在らば我黨才を收むるに足るべし還て之を黨員に報せん。……とて喜悅の情にや堪兼けん。詳かなる顚末さへ聞き得ずして成建英陽等を促し。頭て馬に打乘り彼方を差して馳去れり

今は大軍水を打ちたる如く鎭まりて矢石さへ放つ者もなく。彼等の首將等は一同馬首を整へ陣頭に並列ける處へ。日本公使及柳南陽は金浩權朴英高の二氏を導き來り。柳南陽は先づ進んで日本公使に代りて二人を黨員に紹介し。金氏より。……余先

年事を過て久しく外邦に在り。今や變を聞て來りしに。國王殿下余に革政の大任を囑せらる。不肖の身固より當る所にあらねど。幸に諸君の賛助を得は事何んぞ爲し難からん。……と單簡に陳べける。朴氏も一應の挨拶を了り。大山公使は二氏の功德を讃し更らに柳南陽は其實日本人渡邊鐵臣にして多年韓國の爲め身命を抛ち今日の成功を致せし事を紹介しければ。一同且喜び且驚きつゝ。一齋に國王殿下萬歲。金浩權君萬歲。朴英高君萬歲と歡呼し。尙は大山公使渡邊君万歲の聲まで漢陽の天地に轟き渡り。聽て首將等は雲霞の如き大軍を率ひ凱歌を奏して廓外に退きぬ

即日國王殿下は朝に出でられ。金氏を領議政となし。朴氏を左議政となし。更らに鄭朱明崔成建朴英陽等を召して。鄭氏を外務督辨に崔氏を戸曹判書に朴氏を慶尙監司に其他要路の大臣地方官に至る迄悉く更迭あり。多くは開化黨の人才を用ひたり。而して尹族は其罪大なれども王妃殿下の一族なれば特に官職を削りて全羅道の所安島に配謫し。其他舊官吏は夫々處分あり。柳南陽の渡邊鐵臣氏は此際革新の功勞を以て韓國に優聘の身となり。大臣の資格を以て專ら殖產上の管理を爲すとなれり。又彼の俗離寺に潜伏し居たる香蘭の義塚は。婦女の龜鑑なりとて弘く其名を表彰せられ。

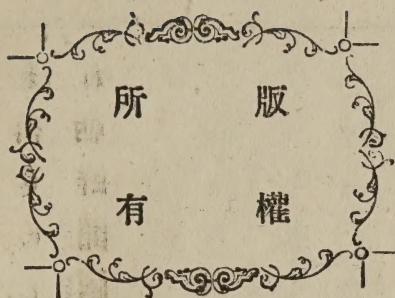
香蘭は此名譽を負ひ日本人なる渡邊氏の配とな り。鄭氏の妻子も聽て漢陽なる鄭督辨の邸に呼寄せられ。白蓮は朴英陽の妻となり。朴氏の忠僕安成忠は主人に忠勤の趣を以て莫大の賞金を賜り。彼の新安村の姉さへ呼寄へて一家頗る繁昌したり之より國王殿下政を親らし給ひ。大院君も時々出で丶注意を與へられ。兩所の間極めて圓滑の交りあらせられ、金氏は亦鋭意に政治の改革を計り。大に人才登用の道を開き。兵備に。殖産に。教育に。万般の規模悉く日本に則り。秩序を整へ外交の如きは從前の政略を一變して清國崇拜の弊を改め。寧ろ却て日本帝國を信じ。大山公使とは最も親密の關

係を結び。文明的事物の誘入に就ては。常に之を日本に求め。遂に清國をして少しも其間に干渉するを得ざらしめ漸く獨立の体面を全ふせり。實に是れ朝鮮開國五百七年春三月下旬の事なりき

小説 東學黨 畢

明治廿七年三月十二日印刷
明治廿七年三月十七日發行

定價金三十五錢

著者　服部徹
東京市赤阪區氷川町三十三番地

發行者　林市兵衛
大阪市西區靱南通五丁目百卅八番屋敷

印刷者　大垣彌太郎
大阪市西區阿波堀通二丁目二十五番屋敷

專賣所　岡島寶文館
大阪市南久寶寺町四丁目

同　大阪廣告社
仝　靱南通三丁目